
偶然という名の奇跡10～文化祭の七不思議～

城ノ内 ジョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偶然という名の奇跡10～文化祭の七不思議～

【Zコード】

Z8793S

【作者名】

城ノ内 ジョウ

【あらすじ】

いくつかの問題を解決して、意氣揚々と文化祭に臨んだTCCCのメンバー。一日目は恙なく終了したのだが、事件は二日目に起こった。それは文化祭の最中しか通用しない魔法の言葉『文化祭の七不思議』から始まる複雑怪奇な事件だった。

プロローグ（前書き）

この作品は「偶然といつも奇跡」というシリーズの続編です。全作を見なくとも楽しむことは出来ると思いますが、より楽しんでいただくために、前作からどうぞ。

プロローグ

その日は文化祭当日だった。普段なら授業中で閑散としている中庭も、今はいつになく賑わっている。活気があると言えるだろう。ごった返す人が多い。みんな例外なく楽しそうだが、一番楽しいのは主催者であるうちの高校の生徒。もつと言えば、文化祭の中心であるうちの学年、すなわち一年生が一番樂しんでいるに決まっている。これは壮大な自己満足なのだ。みんなで力を合わせて完成させた。力を合わせて作り上げた。そんな空氣を感じることができるのは、当人たちだけだ。周りはせいぜい、きっと相当努力したに違いない、と想像するだけである。

とまあ、ここまで偏見丸出しで、偏屈な考えを持つ生徒はそういうまい。俺も自覚している。なぜここまでねじまがった考えを持つているかというと、一つは俺の性格が無残にも捻じ曲がっているから。一つは、こうこうわいわいがやがやした空氣が嫌いだから。そして二つ目は、厄介ごとに巻き込まれているから。

前日まで、他人の悩みに振り回され、他人が持ってきた厄介ごとに奔走していた俺だったが、結局どうかやはりというか、当田も厄介ごとに巻き込まれていた。

さてどこから話そつか。やはり最初から話すのが妥当だらう。事が起きたのは、ステージ運営を任せられた一日田ではなく、特に予定もない一日田のことだった。

プロローグ（後書き）

最初だけ3話あげてみました。
今後は週一ペースでアップしていくつもりです。
またよろしくお願ひいたします。

十月一一日曜日。その日は通常通り、八時半に登校した。文化祭一日目である昨日はTJCGがステージ運営を任せていたため、何と七時ちょうどに登校することになったが、昨日のステージ運営は無事つつがなく終了したので、今日は一日特別やることもなくのんびり過ごすことができる。俺は安堵感に包まれながらあぐびをした。

俺は適当にイスをピックアップすると、そこに腰かけた。なぜ自分の席に着かないのかというと、この教室は展示会場になっているため、自分の席という概念が取っ払われてしまっているのだ。俺以外の人間は、イスに座らず、適当に突っ立つて世間話に興じている。机がなくなつただけでずいぶん広く感じるな、などと考えていると、

「成瀬さん、朝から眠そうですね」

話しかけてきたのは言わずもがな、岩崎だった。

「最近気苦労が絶えなかつたからな、今日ぐらい急けたつていいだろ」

「こいつのことだ、やれ、やる気がないだの、やれ、高校生としての自覚が足りないだの、言わると思つたのだが、

「やうですね。今日ぐらいのんびりできるといいですね」

「これは意外だつたね。ま、それほど俺の稼働が高いといつことだね。自他ともに認めるといつたところか。」

「今日ははやけに優しいじゃないか。何かいいことでもあつたのか？」

「な、それはどういう意味ですか？まるで私が、いつもは優しくないみたいじゃないですか！」

「そうは言わないが、いつもだつたら百パーセント小言が返ってきてたはずだ」

「そ、そんなことありませんよ。私は必要なことしか言いません」

それが小言だと言つてゐるんだよ。しかしまあ小言を言わないでもらえるのはありがたい。気が滅入つてゐるときに、細かいことに關していろいろ言われるのは正直気分を害する。決して短気ではない俺だが、気持ちに余裕がないときはさすがに多少気が立つてしまふ。イライラすると周りに迷惑をかけてしまつからな。できるだけイライラせずに過ごしたい。何より心身ともに疲れてしまつ。イライラすると、誰にとつてもいいことがないのだ。

「成瀬さん」

「なんだ？」

ほんの一秒钟まで目を吊り上げていた岩崎だつたが、すぐにハの字眉毛に変化させて、

「あの、私は今日もいろいろやることがありますて、忙しいのですが、何かありましたら、すぐに連絡してくださいね。忙しいながらもお手伝いできることはあると想つので」

ま、俺とて本当に何もないとは考えていない。につにうイベント“”とはたいてい何か起こる。昨日だつて、小さいながら紛失物や迷子など、多数の事件があつたらしい。その一部がTCCCに流れてこないとも言いたくない。それに、岩崎がこんな状態であることが、

すでに事件であるような気がするね。これがのちのち伏線にならなければいいのだが。

何かあるような予感を若干抱えていた俺であつたが、こんな状態の岩崎を前にこんなこととは言えないのに、とつあえずいついつつておく。

「そういう事件なんて起きないだろうよ。余計なことがあっていいで、あんたは自分のやることに集中しろよ」

「余計なことなんて、そんな……。私はただ、最近は迷惑をかけ続けていたので、ちょっとした恩返しのつもりで……」

迷惑をかけているのはいつものことだ。恩返しなんてことを考えるくらいなら、一度と迷惑をかけないように行動してもらいたいね。これは本音だが、さすがにこんなことは言えない。いくら、岩崎が相手だとしてもな。

「せっかくの文化祭だ。そんなことを考えていたら、もつたいたいだろ？ 精一杯楽しめ。これが俺からの注文だ」

「成瀬さん……」

「これから文化祭一日目、大げさに言つと最終日が始まつとしているのに、なぜ暗くなつているんだらうか。しかも、悩む必要などないことに對して頭を悩ませてはいるなんて、これほど阿呆らしいことはないだろ？ 僕に気を遣つてくれるようになつたのは大した進歩だと思うが、そのせいでも岩崎らしさをなくしてしまつては元も子もない。こういう祭り事を楽しむのが岩崎だ。俺みたいに、騒ぐことがあまり好きではないやつのことなど放つておいてもらいたいね。これが俺にとっての文化祭の楽しみ方なのだ。

「分かりました。私は思い切り文化祭を楽しみます。ですから、何がありましたら絶対に連絡くださいね」

ですから、の意味が分からないな。ま、ここがお互いの妥協点といふことだらう。

「分かったよ。何があつたら連絡する。必要があつたらな」

「またそうやつてはぐらかす。私は真剣に言つているんですよ！」

俺だつて真剣に言つていいのだが。

何やらケンカめいたやり取りをしているうちに、朝のホームルームの予鈴が鳴つた。そこでようやく俺の隣の席の住人、真嶋が参上した。普段は早めに来ている真嶋がここまで遅れることは滅多にない。珍しいこともあるもんだな、と思っていたのだが、やつてきた真嶋を見て納得がいった。真嶋は制服ではなかつた。どういうことかといふと、

「真嶋さん、おはようございます。朝練ですか？」

「おはよう、岩崎さん。うん、去年のクラスのパフォーマンスなんだけど」

今日発表のパフォーマンスの練習をしていた、といふことだ。真嶋はジャージを着ていた。ジャージで本番に臨むわけではないと思うのだが、ま、動きやすい格好ということなのだろう。人望の厚い真嶋のことだ。おそらく有志のパフォーマンスにも引っ張りだこだつたに違ひない。人気者は大変だな、と完全に他人事のように考えていると、

「ところで、成瀬」

急に話しかけられて、少し驚いた。その、ところでの使い方が
あつて、いるかどうか不明だが、おそらく真嶋の中ではつながつてい
るのだろう。

「なんだ？」

「聞きたいことがあるんだけど、」

朝教室に着くなり話しかけられて、その一言田がそれか。何か緊
張するな。真嶋の表情も真剣そのものだ。聞きたいことはいつた
いなんだろうか。

「昨日、誰かと長い間一緒にいた？」

「は？」

何なんだ、その質問は。いつたい何の意味があるんだ？

俺はすぐ元反応することができなかつたのだが、先に若崎が反応
した。

「私も気になりますね。すぐ

言つと、若崎はちうつと真嶋のほうを見た。目があつた真嶋は、は
何かを察知したよつた。なつかしく。いつたい何のやり取りだろうか。

それはまあ置いといて、質問に答えてやるか。と、その前に一つ
確認したいことがある。

「俺が昨日何をしていたか、あんたたちは知つていたはずだが

「あ

「あ

同時に思い出したように声を上げる。そして、しまった、といったような表情になった。おそらくケンカを売るつもりではなかったようだが、俺としては若干イラつと来たので言わせてもらひ。

「俺は昨日一日中グラウンドの特設ステージ脇のテントにいたよ。誰と一緒にいたか、というとそれぞれ委員会や有志で忙しく動き回つていて、暇ができたときたまーにやつてくるあんたたちTCCのメンバーと一緒にいたな。とてもじゃないが、長い間、とは言えなかつたがな」

どう考へても一人でいる時間のほうが多かった。別に誰のせいでもないし、一人でも大した労働ではなかつたので、特別文句はないのだが、自由を奪われたことに対する若干の不満があつた。ま、ちゃんと分かつてはいる。

文化祭は人気者、もしくはアクティブなやつほど予定が埋まりやすい。TCCの面々はなぜか人気者かつアクティブなやつが多く、俺以外の人間は断片的にしか暇な時間がなかつたので、致し方がない。岩崎の提案なのに、岩崎が中心にならないことに多少の疑問を感じはするが、これも事故だと思つて諦めている。何せ、もう終わつたことだしな。しかし、二人はまだ申し訳なく思つてはいるらしく、

「本当に申し訳ありませんでした！もつ少し時間が取れるとと思つていたのですが、考えなしに予定を入れてしまつて……」

「あたしもほとんど手伝えなくて、ごめん」

仕事がない奴に、仕事が回つてくるのはもはや必然である。一人が謝ることじやない。加えて、今回は文化祭だ。いろいろ動き回つ

たほうが楽しいに決まっているし、予定を入れられるなら入れたほうがいい。これはしょうがないのだ。謝る必要などない。

とはいっても謝る必要があるときもある。これは挨拶みたいなもんだ。俺とて謝罪を拒絶するほど、ひねくれているつもりはない。さつさと話を戻すとしよう。

「それで、さつきの質問はいったいなんだ？何の意味があつたんだ？」

話の内容よりも、真嶋の真剣な表情が気になつた。何か深刻な問題だったのではないか。俺はそう思い、真嶋に尋ねたのだが、

「あ、あれ？別に何でもないよ…ね、岩崎さん？」

真嶋は答えを濁し、岩崎に同意を求める。

「え？そ、そうです。別に大したことじゃありません。ちょっと気になつただけです」

岩崎も同様に、答えを濁して無理矢理終わらせようとしている。どう考へても『何でもない』ことでも『大したことじゃない』ことでもないような気がするな。これは嫌な予感と言えるのだろうか。先ほどの質問に何か意味があることくらい、誰だつて見抜くことができるだろう。しかし、この二人はどうせ答えてくれないだろう。隠し事をされるのはあまり嬉しいことではないが、ここは大人しく引き下がるか。

「何を企んでいるか知らないが、俺を陥れるような真似だけはしてくれるなよ」

半分[冗談で]言つた一言だったのだが、

「陥れる、ですか」

つぶやいた若崎の表情と口調は若干真実味を帯びていた。

「まさか、本当に罷でも張つてゐるのか?」

「わ、罷なんて張つてないですよ!誤解です。ただ、広義の意味ではそう言えないともないような……」

慌てて否定した若崎だったが、内容は否定しきれていない。むしろ肯定していると言つてもいい。やれやれ、つかつに[冗談も言えないな。

「ま、俺が誰かと長い間一緒にいるとは思えないから、関係ないと言えぱないが」

「ここで担任が教室に入ってきたため、会話は終了した。形だけのホームルームが終わると、文化祭一日目が始まる。

文化祭自体は九時から始まる。しかし、一般開放は十時からだ。つまりこの一時間は、言つてしまえば直前準備のよくなものだ。なので、この時間から文化祭を楽しもうとする、展示を見るくらいしかないのだが、展示を回る生徒も実際はあまりいない。そんな時間に受付を任せられた俺は喜ぶべきか、悲しむべきか。

現在の教室、もとい展示会場は全く人がいない。うちのクラスの生徒はさつさとどこかへ行ってしまったし、展示を見る客もまだいない。ここにいる人間は俺と同種の他二名だけだ。つまり三人しかいない。

まず一人はバドミントン部部長、三原。

「文化祭って、この浮かれた雰囲気がいいよね。みんな楽しそうで、忙しそうで、はしゃいでいて。昨日よりは落ち着いているけど、今日もそんな感じ」

楽しそうでうらやましい。岩崎のように攻撃的な社交性ではなく、程よい程度の社交性と積極性を持ち合わせているこいつは、いい意味で普通の生徒と呼べるだろう。普通の生徒として、模範的な姿である。対して、もう一人は、

「あ、そうだね。でも、私は少しついていけないかも」

内氣で消極的な生徒の代表とも呼べる。同じくバドミントン部所属の戸塚。

「」の一人とは学年が上がつてからたびたび会話を交えるようになつたのだが、まだそれほど親しいとは言えない。しかしまあ俺の交友関係から言えば、親しいほつと呼べるだつ。それは、三原だけなのだが。なぜかと云ふと、

「成瀬君は、昨日は文化祭を堪能できた?」

俺に話しかけてくるのは、もつぱら三原だけだからだ。

「さあな。楽しんだかどうかは微妙だが、文化祭気分を味わつたことは確かだな」

「あ、そつか。昨日は一日ステージ運営をしていたんだっけ?」

「ああ。本当に一日中な」

「あらー……。それは災難だつたね。」¹苦勞様

社交辞令だということは分かりきつてゐるのだが、無性に心に響く言葉だつた。俺はそれほど精神的に參つてゐるといつことなのだらうつか。

心を落ち着けるために、俺は小さく息を吐いた。そして、そんな心の動きを悟られないように話題を振りかえす。

「そういう二人は、昨日は文化祭を楽しむことができたのか?」

「そうだねえ、昨日はずつと主催側だつたね。だから今日はお密さんとして、文化祭を楽しむことにするよ」

正しい文化祭の楽しみ方と言えるだつ。正統派だ。模範生と言える。三原は文化祭をしつかり楽しんでいた。では、こいつはどうだろつ。

「で、戸塚は？」

「え、あ、私ですか？」

お前の名前を言つただろうが。それ以前に今は俺達三人しかいないのだ。俺が分かりやすくなづくと、

「わ、私は特に有志とかやつていないので、美聰ちゃんの有志の出し物を見たり、友達の出店を見て回つたり……」

戸塚はアクティブではないため、有志のパフォーマンスをやつたり出し物をしたり、ということはしていないのだが、それでも正しい楽しみ方をしていたみたいだな。ちなみに『美聰』とは三原のことだ。部活も同じで、クラスも同じ。この二人は見た目通り、かなり仲がいいみたいだな。

それにしても、

「……」

こいつはいつになつたら俺に慣れてくれるのだろうか。別段好かれたいとは思わないし、好かれる性格をしていると思つていれない。しかし、もう少しまともに会話をしてもらいたいね。引っ込み思案でシャイということなら、目を見て話せ、とは言わないが、そんなにおつかなびつくりしゃべられると、こちらも気を遣つてしまつ。

「」の様子には三原も苦笑い。『困つたなあ』といった感じだが、ここは三原を頼らざるを得ない。さすがに無言で一時間過ぐすのは気が重いし、一人だけでも話していくもらいたい。この際、俺のことはシカトしてもらつても構わない。

「そういえば、成瀬君」

とはいって、何度も言つようこここの場には三人しかいない。一人で話すのも三人で話すのも大して変わらないし、嫌いでなければ普通話しかけるだろつ。というか、自然に三人で話す展開になる。にもかかわらず、あえて一人で話していると雰囲気も悪くなる。三原がここで俺をシカトしないのは、当然と言えば当然である。

「なんだ？」

「昨日誰かと長い時間一緒にいた？」

「…………」

いつたいどんな話を振られるのかと思つたら、今朝も聞いた内容だつた。何の脈絡もない会話の中で、同じ質問を違う人間からされたら、これは偶然とは言えないだろつ。しかもそれが、日常生活では滅多に問い合わせられないような内容ならなおさらだ。

「あれ？ 私なんか変なこと言つたかな？」

俺が黙り込み、さわやかとは無縁の顔をしたせいだろつ、三原は焦つたように質問を重ねた。いや、まあ変なことと言えばそうなるのかもしれないが、実際質問自体はそこまでおかしなものではない。一回目だからこそ、俺はここまで渋い反応を見せただけだ。

「いや、その質問真嶋からもされたんだ。ホームルーム前にな

「あ、なんだ」

またしてもいつもの苦笑。すっかり癖になってしまっているような感じだ。で、質問の答えたが、

「長い時間同じ場所にはいたが、誰かと一緒ににはいなかつたな。」

「番長かつたのは一人でいる時間だ」

「やついえば、そつだつたね。本当に苦労様です」

今度はわざとらしく頭を下げる三原。先ほど以上に丁寧な態度だつたが、さすがに今回は俺の心を揺さぶりはしなかつた。

「で、今の質問はなんだ？ 何の意味があるんだ？」

意味というか、その質問で何が分かるといつのだらうか。誰か一人からされた質問ならばあつさり忘れることができるが、同じ質問を一人（岩崎を含めると二人）からされると、さすがに気になる。

「真嶋さん教えてくれなかつたの？」

「はぐらかされた」

「まあ、そつだつうね」

なんだか知つた風である。

「えつと、たぶん成瀬君はあまり興味ないと思つけど、」

と言つて、三原は話し始めた。何とも興味を失う切り出し方である。

「マンガや小説で、よく『学校の七不思議』つていうフレーズが出てくるじゃない？ 今時は都市伝説つていうのかな。ま、何でもいいんだけど、うちの学校にもその七不思議つてやつがあるらしくて」

「ここまで聞いて、さらに興味を失つた。七不思議？ 都市伝説？ バカバカしい。占いや怪談よくだらない話題だと思うね。しかしま

あ、俺がきっかけで話し始めたのだ。一応最後まで付き合つてやることするか。

「文化祭限定の話なんだけど、学校にいた時間の三分の一以上を同じ人と過ごすと、親密な関係になれるんだって。何でもその昔、文化祭で告白を決意した女生徒が、思いを寄せる男子生徒に一度も話しかけることができず、その日の帰りに自殺をしてしまったらしいの。思いを伝えられなかつた悲しみを知つてゐる彼女が、死後もこの場所にとどまり、文化祭で恋愛を成就させようと思つてゐる生徒を後押ししているんだって」

限りなく胡散臭い話だ。なんだその、とつてつけたような設定は、全く以てリアリティがないし、説得力もない。信じるか否か悩む以前の問題だ。悩むに値するきつかけすら存在しない。

「へえ……」

俺のため息交じりの返事を正しく受け取つた三原はまたしても苦笑い。ま、こいつは話し始める前に、俺は興味ないだろうと宣言していた。思つた通り、といつた感じだろう。別に落胆した様子はないので、俺が申し訳なく思う必要もないわけだ。対して、

「へえ!」

俺と同じ言葉を発した戸塚だったが、明らかに俺とは違つ反応を見せた。まさか、今の話で興味を持つたのだろうか。

「結衣は昨日誰かと一緒にいた?」

結衣とこつのは戸塚のことである。興味を持つたらしい戸塚に対

して、三原が声をかける。

「私は美聰ちゃんかな。でも三分の一までは届かないと思つけど」

「そつか。じゃあ私たちは親密な関係になれるね！」

「そ、そつかな……」

「冗談めかした風に三原が言つと、戸塚はなぜか照れてしまつたようだ。よく分からぬが、一人はすでに仲がいいのだう。なぜそこで照れる必要がある。

「ま、私とはこれで十分親密になつたから、今日は別の誰かと一緒にいることをお勧めするよ。成瀬君もせつかくだから頭の片隅ぐらには置いてみたらどうかな？」

「善処する」

信じる気には全くならないが、三原の言つとおり、頭の片隅に置いておくくらいならしてやつてもいいだう。どうせ今日はさほど考えることもないだうし。それにしても片隅以上にスペースを与えてやるつもりもないが。俺はこんな様子だったが、

「え」

戸塚は、何やら深刻な雰囲気を醸し出し、必要以上に真剣な表情を作つた。そして、おそらく誰か特定の人物が頭を駆け抜けたに違いない、必要以上に赤面した。

「言われなくても、そう考えていたみたいね」

俺でも分かつたのだ。付き合いの長い三原が気付かないはずがない。弱点を的確にとらえた三原の発言は、効果抜群だったようだ。

「そ、それより七不思議つて、他にもあるの？」

あからさまな話題の転換だった。分かりやすいくもまだあるな。
しかし、そこをしつこくつづいて戸塚をからかうほど、三原は性格が悪い奴ではなかつたようで、戸塚の要望通り、他の七不思議について話し始めた。その場にいた俺も七不思議についてずっと聞いていた。どうやら三原もそこまで詳しくないらしく、七不思議自体の話ではなく、その噂の話をしていた。ほしい情報が手に入らなかつたわけだが、戸塚はいい聞き役になり、感心するほど聞き入つていた。

結局十時になるまで客が一切来なかつたため、終始その話をしていたのだった。

クラスの出し物である展示の受付という任務から解放された俺は、昼食までの一時間、自由時間となつた。特別用事もなければ、回りたいところもない俺は、とりあえずぶらぶらすることにした。

まず向かつたところは、前日俺の居場所となつていたグラウンドの特設ステージ。今日は文化祭実行委員の連中と生徒会で共同企画したイベントをやつていた。これのおかげで、俺は今日解放されているわけだ。ま、もともと半分ほど生徒会に譲るということで、ステージ運営の許可が下りた代物である。当然と言えば、当然なのだが。

連中の出し物もそれなりに盛況を見せていた。見た感じ、一番盛り上がり上がつているのはステージ上にいる生徒会＆文化祭委員の連中で、見物客とはやや温度差を感じる。運営が異常に頑張ると、密が引いてしまうんだよな。

続いて向かつたところは、一番華やかな中庭。ここはステージがあり、出店があり、ベンチがあり、何しろ人が集まりやすいところなのだ。一番人がいると言つても過言ではない。出店とステージといつも以上の人の数で、今日の中庭は少し手狭な感じだな。こういうところに一人でいると、何気に疎外感を覚えるね。一人で行動している人間などおらず、みんな笑顔で楽しそうだ。対して俺はどうだろうか。傍から見た俺は、はたして楽しそうだろうか。きっと違うだろう。居心地が悪い。場所を変えよう。俺が体育館に向かうべく、人ごみをかき分け行軍していると、

「おーい、成瀬」

不意に話しかけられた。目を向けると、そこには俺以上に似合つていらない人物がいた。

「そこで何をしているんだ?」

「何つて、見りや分かるでしょ。クレープ焼いてんの」

自称スーパー美少女お嬢様日向ゆかりだ。しかし、見慣れぬ恰好をしている。

「あんたがそういう格好していると、そこはかとなく違和感を覚えるな」

日向はエプロンを着用し、頭には三角巾をかぶっている。別におかしくない。今は文化祭で、日向がいるのは出店なのだから。ただ、正直言つて見慣れないと。

「失礼ね。あたしだってキッチンに立つことくらいあるんだ。あたしは何でもこなすオールラウンダーだからね」

「オールラウンダーつぶりは昨日散々拝ませてもらった」

今日はクラスの出店で働いているようだが、昨日はTCCC主催の特設ステージで活躍していた。最初は大人しくギターを弾いていたが、その後キーボードを担当し、最後にはマイクを握つて、観客を魅了する歌声を披露していた。高校の文化祭であれほどのステージを披露できるやつはそういうやつだ。マイクパフォーマンスも絶好調だつたな。

「まあね。あたしみたいに才能に満ち溢れている人間は、その才能

で人々を楽しませる義務があるから」

いつたい誰が中心で誕生したバンドだったのだろうか。だが、それをとがめる人間は誰もいなかつたし、軽音部女子たちは本当に日本に感謝していたようだつた。ま、あれが成功のお手本のようなステージだつたし、今更俺が苦言を呈するのはおかしいというものだらう。

「あんたの才能のおかげで、昨日は助かつたよ」

客のいなステージは、一重の意味で寒いだらう。そんな中でステージ運営など、考えただけでも嫌だね。しかし、礼を言つタイミングを間違えたな。なぜかこいつは今絶好調だ。先ほどの自信過剰発言を見れば一目瞭然。傲然と胸を張つて、思い切り嫌なやつになるだらう。と、思つてはいたのだが、

「いや、あたし一人の力じゃないでしょ。みんなで作つて、みんなで盛り上げて、みんなで楽しんだ。だから成功させることができた。これでいいんじゃないの？」

似合わない照れ笑い。意外だな。

「謙遜して、周りを評価するなんて、らしくないじゃないか」

「謙遜じゃなくて、正しい評価だよ。それに、」

照れ笑いが、苦笑いに変わつた。

「一昨日から感謝されすぎて、ちょっと食傷気味なんだ。だから、あんたにまで感謝されると、胃腸炎になっちゃうよ」

「どうやらこいつちが本音らしい。褒められるのは慣れているので素直に受け取れるが、感謝されるのは慣れていない、ということか。これも珍しい気がする。

「それよりクレープ買っていきなよ。どうせ、まだ何も買ってないんでしょ？少しさは積極的に文化祭に参加しなさい。受け身じゃなくてね」

言われてみれば、俺は自分から参加しているといつも気分じゃないな。どうにも巻き込まれてこいる気持ちになつてこる。しかし、俺はこういう大人數で騒いだりするのが苦手なんだし、人ごみに至つては躊躇いなく嫌いだと言えるレベルなのだ。やれ、と言わされたからつてそう簡単に気持ちを変化させることはできない。少なくとも、乗り気じやない。と、そういうえば、

「あんただつて、こいつお祭り騒ぎは嫌いじやなかつたか？」

こいつは俺と違つて、それなりに人気者だし、お嬢様であるにもかかわらず情に厚いし、ハートは熱い。しかし、群れるのはあまり好きじやない。テンションも必要以上に上がらない。そんなイメージだったのだが、

「別に嫌いじやないよ。ただ、苦手なだけ」

「どう違うんだよ」

「全然違うんだよ」

よく分からぬが、違つらじい。

「ま、あまり好きじやないのは確かだね。でも今回は結構楽しめてるよ。周りと同じようにははしゃげないけど、あたしの中では十

分満喫しているよ」

「こつとの付き合いは、かれこれ一年になるが、こんな奴だっただろ？自分よりレベルの低い人間は完全に上から見下ろし、才能のない奴を否定していたような雰囲気があった。誰からも距離を置くイメージがあつたが、どうやらそれも過去の話らしい。

「ま、つまらないよりは楽しいほうがいいに決まっているさ。その気持ち、俺にも少し分けてほしいね」

「あんたは見ようとしていないだけで、楽しいことは周りに山ほど転がっているよ。それはもう入れ食い状態でね」

「そんなもんかね」
「そんなもんだ」

「言つて、日向はクレープを差し出した。

「どうあえず」こつを分けてあげる」

よく分からぬが、俺の気持ちは少しだけ軽くなつた気がした。

「ありがたくもらつておく」

軽くお礼を言つて、日向からクレープを受け取ると、

「四百円になります」

普通に代金を請求された。分けてあげる、と言われたから、てつり、「馳走してくれたのかと思ったのだが。それはともかく、

「高くないか？」

「いくら文化祭価格とまこと、高く過せるだらう。これでは俺でなくとも、買つ氣がないだらう。いや、それにしてはすいぶん忙しそうだな。これはどうこうことだらうか。クレープにとんでもない仕組みが隠されているのだらうか。この謎は田向の言葉で全てつきり解決した。

「それ、一ひとつ分だから」「どうこうことだ？」

俺は一つもいらなか。と思つてると、田向はたつた今自分で作ったクレープを適当にラッピングすると、そのままかぶりついた。

「うへへへへ」と

つまり、田向が今食べた分まで俺に請求したらしく。おじれ、とこつことか。

「何で俺があんたの分まで払わなければならぬ」

「いいじやない。今日は文化祭なんだし。楽しまなきや 捨でしょ」

あんた、すっかり楽しんでいるな。こつこつ行事は苦手なんじやなかつたのか？

「早く払いなさいよ。四百円になつまーす。別に二五百でもいいけど、そしたらあんたが手に持つてこる奴を返しなさいよ」

じつしても俺においがかるひつこ。井、今回は大田に見てやる。最近世話になつぱなしだつたからな。一五百で済むなら安くものだ。

「毎度あり！」

俺が手渡すと、お嬢様らしからぬ言葉を言つて受け取つた。そして、

「お礼に面白い小話を一つ」

さらりと「珍しくない」とを言い始めた。

「あんた、文化祭の七不思議って知つてる?」

またその話か。しかも、日向が。

「ああ」

「さすが天下のTCC。」の手の話題は得意分野かな?」

俺としては全くの専門外だが、TCCらしいとは言えるかもしれないな。ま、聞いたのは今日が初めてだが。

「文化祭当日にケンカすると、その後一生仲直りできないらしいよ。何でも文化祭でケンカしたカップルが翌日二人とも事故で命を落としたんだって。その後毎年そのカップルの靈が文化祭に現れて、ケンカしたカップルを不幸に陥れているんだって」

「何とも縁起の悪い七不思議だな」

三原から聞いたやつは、夢見がちな女子生徒が適当に作ったであらうつ楽しげな雰囲気が出ていたが、こいつは後味の悪い話だ。正直聞きたくなかったね

「ま、あんたたちにそんな心配はないと思つけど、一人がケンカするところに火の粉が降りかかるんだ。仲良くしてよ
「善処する」

なぜ田向に火の粉が降りかかるのか、それは置いておくとして、これ以上人間関係の面倒事は勘弁願いたい。ケンカなんかしたいと思わないのは、俺とて同じ気持ちだ。

「あれ？ あたしはあんたたち、としか言つてないけど、あんたと、誰のことだか分かつたの？」

からかうような、楽しんでいるような、そんな視線を向けてくる田向。何となくだが、こいつは俺が面倒事に巻き込まれることを望んでいるような気がするな。人の不幸を楽しむのはいい趣味とは言えないぞ。

「誰が相手だらうと、ケンカなんてしたいと思わないだらう
「正論ね。正論過ぎて、つまらないわ」

正論を言つて、非難されるのはさすがに納得いかないぞ。しかも、理由がつまらないから、なんて、わがままが過ぎるぞ、お嬢様。

「ま、いいわ。とにかく、文化祭くらい楽しみなさい。そーんな仏頂面していると、幸福が逃げるわよ」

「大きなお世話だ」

言つて、今度こそ俺は体育館に向かった。

体育館は異様な雰囲気だつた。俺が足を踏み入れた時、ダンス部のパフォーマンスの最中で華やかでリズミカルな雰囲気だつた。ダンス部のパフォーマンスが終わると、今度は有志によるバンド演奏で、そのあとはまた有志のブレイクダンス。次は声楽。今度はバンド演奏なのだが、アルトサックスがいるためややジャズティスト。

といった感じで、五、十回ごとにグループが代わり、演目内容が変わる。全く統一感もなく、客もひっきりなしに入れ替わる。いろいろ混沌とした雰囲気だ。午後一からは一時間ばかり演劇部が独占して、演劇が行われるらしい。もはや何でもアリだな。

体育館に来ては見たものの、前のほうまで行つて観覧する気にならず、入り口付近でいつでも退散できるよう壁に寄りかかり、立ち見を敢行していた。

今までやつていたグループが終了すると、またしてもざつと客が移動を開始する。出ていく客と、入ってくる客が入れ替わる。その様子をぼんやり眺めていると、不意に、

「あ、成瀬」

声をかけられた。声がしたほうに焦点を合わせると、

「相変わらずつまらなそうな顔しているね」

そこにいたのは隣のクラスの知り合い、天野だつた。

「そんな顔しているか？」

「自覚ないわけね。つていうことは案外楽しんでるの？」

そういうわけでもないが。

天野は一緒に来た友達を先に行かせ、一人俺の隣にやつてきた。

「いいのか？ 何か見に来たんじゃないのか？」

「この次の次。友達がダンスするらしいから冷やかしに来たの」

つまり今のステージには興味なしといふことか。

「あんたとこいつして話すのも久しぶりね」

俺に話しかけたのは、友達のステージまでの時間つぶしといふことらしい。

「そりゃあんたは俺のことが嫌いなんだ。当然だろ？」「別にあんたは嫌いじゃないわ。あんたの協調性のないといふと自覚のないところが嫌いなだけ」

協調性がない、というのは自分でも知っているが、自覚がない、とはどういうことだろうか。天野の言葉に、俺は慄然となる。しかし、当の天野はまるで意に介さず、新たに会話を開始した。

「聞いたよ」

脈絡がなさすぎて、何の話か分からないぞ。と、普通なら思つところだろうが、俺には思い当たる節があつた。

「真嶋のことか？」

「うん。TCCに入部したんだって？」

真嶋がTCCに入部した。これは事実だ。いつたい何でこのタイミングなのだろうかと思うのだが、岩崎は理解できていたようで、一つ返事で了承していた。ま、動機は不明だが、断る理由もない。

「あたしから見たら、何で今更って感じだけど」

「あんたは今更入部した理由を聞いたのか？」

「詳しく述べていいけど、何か心境に変化があつたらしいよ」

心境の変化ね。それは俺も思い当たる節がある。心境が変わった理由は分からぬが、とにかく真嶋は変わった。文化祭の準備辺りから、妙に張り切っている雰囲気があった。真嶋はことあるごとに手伝わせてくれ、と俺に進言してきた。それは、今までの真嶋とは違っていた。何に対する姿勢が変わったのか分からぬが、とにかく積極的になつていた。

「いい変化だつたのかね」

「さあね。でも変わることは自然なことだと思つよ」

それはそうかもな。人間は環境に適応できる生き物らしい。住めば都、郷に入つては郷に従え。このことわざはともに環境の変化に対して適応することのたとえだと黙つて差し支えないだろう。

「そういうあんただつて変わつたと思つ」

「そうかな？」

「俺が初めてあんただつて話したときは、尖つたナイフみたいなやつだつた」

「そりやあんたのせいでしょ。あたしはもともとマイペースで穏やかな人間なの」

穏やかでマイペースね。にわかに信じられないな。ま、今となつては尖つたナイフ、といったとえのほつが似合わないのは確かだな。

「とにかく、あんたは今すぐ変わりなさい。その根性なしで後ろ向きな性格を何とかしなさい」

もしかして、その話がメインだったのか？真嶋の話は引き合いで出しただけか？

「急には無理だな。生まれたときから後ろ向きなんだ」

「そんなわけないでしょ。まさか、逆子だった、なんてつまらない冗談を言つつもりじゃないでしょ、うね」

「つまることは言つてんじゃねえよ。」

「生まれつき後ろ向きな人間なんていないわよ。人間は前しか見えないんだから。だからあんたが後ろばかり見ているのは、考え方の問題よ」

結局説教になるのか。少しばかりくなつたかと思つたが、どうやら俺の勘違いらしい。嫌いじゃないとは言つてはいるが、『生理的に嫌い』から『考え方が嫌い』になつただけ、ってことか？あまり嬉しくないね。

俺がさりげなく嘆いていると、自称マイペースの天野は、またしても話題を唐突に変化させた。

「ところで、あんた文化祭の七不思議って知つている？」

「おいおい。天野までそんなことを言い出すのか？七不思議つてや

つはそんなに流行つてゐるのか。うちの学校の行く末が気になるね。

「最近よく聞くな」

「そ。あなたはある意味専門だしね」

「嫌なこと言つな」

俺は占いだの都市伝説だの、つてやつは全く信じていないし、詳しくもないし、興味もないぞ。そんな俺に、専門、だなんて言つんじゃない。勘弁願いたいね。

「文化祭当日からイメチョンすると、必ずうまくいって、ひいては人生を変えてしまうらしいよ。何でもその昔、根暗のいじめられっ子がクラスのみんなを見返すために、一人でヘビメタやつたらしい。そしたらものの見事に成功して、その後アーティストになつてしまつたんだって。今でもその人の魂がここに残つて、生徒の意識改革を後押ししているらしいよ」

「だんだん話のつくりが雑になつてきてるな……」

もはや俺は話を楽しみ始めていた。どれも必ず妙な根拠ハジキがついて、最後は必ず靈的なものの暗躍がある。もしかして、全部一人が作った話じゃないだろ? な。でなければ、こうも同じような構成にならないような気がする。もしくは『文化祭の七不思議制作委員会』などという意味不明な団体が裏で動いているのかもしれないな。この思考もどうでもいいな。

「とりあえず、手始めに文化祭を楽しみなさい」

「そうは言つてもな……」

「ちょうどいいわ。一緒にあたしの友達を冷やかしに行きましょ? 「は? 何で俺がそんなことを……」

俺が抗議に出たところ、天野は武力行使に出た。

「あんたの意識改革の手伝いをしてあげるって言つてんのよ。無理矢理でもいいからはしゃぎなさい。綾もいるから！」

友達、としか言つていなかつたから、俺の知り合ひはいなかつと思っていたが、どうやら真嶋も参加しているパフォーマンスだつたらしい。真嶋がいようといまいと、俺ははしゃげないのだが。

天野は俺の腕を引く。俺は一応抵抗したが、周りの目が気になつて、なりふり構わざといつわけにはいかず、結局天野の言いなりになつてしまつた。

友人のダンスが始まると天野はにやにやしながら手拍子と妙な合ひの手をしていた。俺はといふと、はしゃげるはずもなく、適当に手拍子をしていただけだつた。

一方真嶋はといふと、どうやらこちらに気づいていたようだ。しかし、踊つている最中は一度もこちらを見ず、結局最後まで俺を見よつとしなかつた。おそらく恥ずかしかつたのだろう。

曲が終わると、天野はやはりいぢやもんをつけてきたが、俺は適当に躲して、逃げるよつと体育館を後にした。気が付けば、昼休みになつていた。

ようやく午前の部が終わり、昼休みになつた。かばんは部室においてある。なので、必然的に部室で昼食をとる。たとえかばんが教室にあつたとしても、俺は部室で昼食をとつていたと思うが。

俺が部室に向かつて、道中で石崎と真嶋に出会つた。

「あ、成瀬さん。部室でお昼ですか？」

「ああ。かばんが部室にあるからな」

「我々も」一緒にようじいですか？」

別に確認なんていらない。あの部室は俺だけの物じゃないしな。もちろん俺はオーケーだ。石崎も当然オーケーなのだろう。さて、もう一人はどうだらうか。

「真嶋がよければ、な」

俺の言葉に、真嶋が視線を上げる。睨みつけてくるが、迫力はまるでないな。しかし、そんなに恥ずかしかつたのだろうか。なんと真嶋は、俺と会つた瞬間から、顔が真っ赤だつた。

「真嶋さん、どうかなさつたんですか？」

「別に、何でもない」

何でもあるような考え方だった。当然石崎は、俺に疑いのまなざしを向けてくる。仕方ない、俺から言つてしまつ。

「午前中、真嶋のダンスを見たんだ」

「それだけ、ですか？」

岩崎の疑問はもつともだろう。俺も、それだけか、と問われれば、たぶん、としか答えようがない。なぜなら、他に心当たりがないからだ。

「その辺は本人に聞いてくれ」

俺と岩崎は真嶋を見る。すると、

「だって、まさか成瀬に見られるとは思わなかつたんだもん……」

そんなこと言われてもな。俺とて見る気などなかつたし、真嶋がいつどこで何をやるか、全く知らなかつたのだ。全ては天野のせいだ。ま、天野がいなくとも、おそらく俺は真嶋のダンスを見るこになつただろう。しかし、真嶋に気づかれることはなかつただろう。そういう意味では、真嶋の中で、見られた、という意識は芽生えない。とにかくで、やはり全て天野のせいなのだ。

「…………」

恥ずかしそうに顔から火を噴いている真嶋を見て、岩崎は何やら思案していた。そして、

「成瀬さん。私も午後にいくつかパフォーマンスに参加するんですけど」

「そうか」

「私も午後にいくつかパフォーマンスに参加するんですけどー。」

何なんだ、こいつは。何をアピールしているんだか。そんなに見

てもらいたいのか。真嶋とは正反対のリアクションだな。ま、こいつはハードルが高いほうが燃えるタイプだからな。

「分かった。見に行つてやるから、時間と場所を教えて
「はい！約束ですよ」

ようやく部室にたどり着いた俺達三人は、席に着くや否や、弁当の包みを解いた。

「成瀬さんは午前中、何をしていたんですか？」

「俺は展示の受付。そのあとは適当にぶらついていた」

「そうですか。どうですか？少しは楽しんでいますか？」

「どうだらうか。会う奴会う奴に、もつと楽しめ、と言われたせい
で、何となく気が重くなっているような気がする。

「そういうあんたはどうだ？午前中何をしていたんだ？」

「私は、最初来校者の皆さんとの案内をしていましたね。そのあとは少し自由なじかんがあつたので、いろいろ見て回りました。泉さんの占いにも行きましたよ」

「そういや、姫は久しぶりに占い少女に戻つてているんだつたな。今ではただの生意気な小娘になつてているが、最初はそんな肩書きだつた。

「真嶋さんはいかがですか？何か面白いものはありました？」

「え？ そうだなあ……。あたしはやっぱりみんなのパフォーマンス見てるのが一番楽しいかな。あと、まだうちのクラスのプラネタリウム見てないから、午後はそつちに行こうかな」

「ああ、そういえば私もまだプラネタリウム見てないです。一緒に行きませんか？」

「うん。いいよ。何時ごろ？」

「そうですねえ、昼休みが終わった直後でどうですか？」

「うん。いいよ」

「いいね、行きたいところがたくさんあるやつら。」うして予定がどんどん埋まっていくからな。かといって、いつもやましこわけでもないが。

「成瀬さんはいかがですか？一緒にプラネタリウム行きませんか？」

「とても魅力的なお誘いで、その心遣い痛み入るが、残念だな。

「午後一でまた受付だ」

なぜだか俺はまたしても展示の受付を任せてしまっているのだ。確かに俺は暇だし、昨日はまるで手伝うことことができなかつたが、この扱いは納得できない。

「あ、そうでしたね。」苦労様です！

「劳われても嬉しくないぞ。

「今度の相方は誰ですか？」

「戸塚だ」

「一日二度受付をやる。しかも、相方が同じ。なかなかない偶然だよな。おそらく戸塚も暇なんだろう。友人のパフォーマンス巡りくらいしか予定がないようだしな。」

「あれ？確かに、午前中も戸塚さんと一緒にじゃなかつた？」

今まで黙り込んでいた真嶋がよびやかへ復活した。それほど恥ずかしかつたのだろうか。まだ、顔の赤さは取れていない。

「よく知つてゐるな。午前中は戸塚の他に三原もいたが

「…………」

今度は深刻そうな顔をして黙り込んだ。一体何なんだ？情緒不安定にもほどがあるぞ。

「…………」

隣で岩崎も黙り込んで、何か考え方をしてゐるような顔をしている。どうこうことだよ。

「どうした？」

俺が岩崎に話しかける。この一人が、俺が感知できない電波を受信したのかと思っていたのだが、

「あ、えーっと……。や、そうです！今年の文化祭は、いろいろな噂があります！」

とりあえず急激に話題を変えてきた。よく分からぬのだが、どうやら俺が触れてはいけない話題だったようだ。変なやつらだな。

えー、それで、岩崎は何と言つた？今年の文化祭でいろいろな噂？あー、嫌な予感がするな。そんなことを言われて思い浮かぶのは、

一つしか、あ、いや、三つほどあるな。

「えー、成瀬さんは『文化祭の七不思議』って知っていますか？」

「…………」

やはり来たか。どいつもこいつも、同じことばかり言いやがつて。何がそんなに面白くて、七不思議なんぞに現をぬかしてやがるんだ？今日が文化祭だからって、頭の中までフェスティバルになってしまっているのだろうか。

「……それで、その『文化祭の七不思議』とやらがどうかしたのか？」

「ええ。文化祭当日に大切なモノを失くしてしまって、その後の人生において、さらに大切なモノを失くしてしまって、という話なのですが、」

「そいつは大変だな」

もうこの状況に慣れてしまつた俺は、適当に相槌を打つ。

「そりなんです。でも、文化祭のうちに失せ物が見つかると、その後の人生でもう一度と大切なモノを失くすことはない、らしいですよ。何でも、その昔、文化祭で財布を失くした双子の女生徒がいまして、片方は一生懸命探してその日のうちに見つけ出し、もう片方はどうでもいい、と適当に探して結局見つけることはできなかつたそうです。すると、今まで似たような人生を送つていた二人だったのですが、その日を境に、全く違う人生になつてしまつたようです。それ以来、二人の女子生徒の靈が文化祭に出没し、自分と同じ未来を歩む生徒を探しているとか」

ため息。この話を聞いた俺の感想は、この一言だね。もういい加

減にしてもらいたい。これで四つ目か。みんなこの程度のクオリティーの作り話に振り回されているのだろうか。にわかに信じがたいが、どうやら噂として蔓延し始めているらしい。悲しいな。

「そうなんだ、あたしも気を付けないと！」

「ええ。昨日も盗難や紛失物がいくつかあつたそうなのですが、その中にはまだ見つかっていないものもあるようですよ」

「そつか！ それって盗難も含まれるんだ。なおさら気を付けないといけないね」

俺を差し置いて、何故か盛り上гарる一人。この場合、おかしいのは俺のほうなのだろうか。

「それにも、」

ひとしきり盛り上garると、俺に話を振つてきた。

「成瀬が七不思議を知つてゐるとは思わなかつたよ」「この手の噂からは一番縁遠い人ですからね」

確かにな。先ほどは天野から専門、などという迷惑極まりない勘違いをされていたのだが、二人は正しい評価をしていたらしい。もしかすると、俺は周りの人間から占いだの都市伝説だのに詳しい人だと思われてゐるのかもしれない、と思つたが、そうでもないらしい。

「で、誰から聞いたんですか？」

俺はすでに七不思議のうち、四つ知つてゐるのだ。なので、誰から、と問われば、四人の名前が上garるのだが、七不思議、というも

のの存在を知ったのは三原との会話がきっかけだった。いや、待てる。

「きつかけは、あんたたちとの会話だな

「え？」

「朝、昨日誰かと長い間一緒にいたか、といつ話をしただろう？」

思い出したのだろう。一人の表情が凍りついた。

「三原に同じ質問をされてな。理由を聞いたとき、七不思議の存在を教えてもらつた」

「あ、ああ、そうですか」

「へ、へえ」

何だ、こいつら。やはり何か企んでいたのだつたか。

「確かに、文化祭の三分の一以上を同じ人と過ごすと親密になれる、

だつける? どうせ俺は誰とも親密になれないだろ? よ」

「あ、別にそういうことが言いたかったわけではないのですが……

「じゃあどうこう」とだよ」

「そ、それは……」

言ひ淀んでいる時点では怪しいことにの上ないのだが、ま、この調子でいけば、今日も誰かと三分の一以上行動を共にする」ことはないだろ?。この手の噂で、俺が関係ありそうなものなど、ほとんどないと言つていい。それは残念がるところなのだろうか。

「そんなに拗ねないで下さい! 所詮眉唾物の噂話ですよ。適当に面白がつて、笑い話にすれば十分です」

それをあんたが言うのか？朝、岩崎と真嶋はかなり真剣な表情で聞いてきたじゃないか。まさか、あれは俺を騙すための演技だったのか？つまりないことに演技력을使つた。

まあ、それはそれとして。

「七不思議というからこま、その噂は当然七つあるんだよな？」

「え？ええ、おそらくあるんだと思こますよ」

おれらしく、とは曖昧な答えたな。

「あんたも全てを知つていいわけじゃないのか？」

「はい。まあ噂なんで、ちゃんと定義されていいわけじゃないありますよ」と、口頭のみで伝えられているので、同じ噂でも微妙に差異が発生しちゃつたりしているものもあります」

もとは七つだったようだが、どうやら枝分かれしてしまっているらしい。

「私が知つているものは、一応四つだけですね」

なんと、俺と同じ数ではないか。

「あたしは三つだけ」

そして、俺のほうが真嶋よつ多い。「これは喜ぶべきか否か。俺は全く興味ないのだが、案外世の中というものはそういう風にできているのかもしれないな。本当に欲している者は得られず、大して欲していない者が手に入れる。いや、このたとえはおかしいな。岩崎や真嶋だってそこまで真面目に収集しているわけではなさそうだし。

それにしても、七不思議ね。すでに四つ知つてしまつていて。興味ないと言いつつも、だ。どうやらまことしやかに噂は広まりつつあるようだし、中には振り回されている連中もいるかもしれない。そう考へると、何か起きててもおかしくないのかも知れない。俺のあずかり知らないところで何が起こつても知らぬ存ぜぬで通すことはできるのだが、噂が勝手に俺の下に集まつているこの状況をかんがみるに、心中穏やかではいられない。俺が思うことは一つだ。

「何か、嫌な予感がするな」

さて。昼食の時間が終わつた俺は、展示の受付を再度全うしよう
と教室に向かつた。朝一の時間も人が全く来なかつたが、午後一も
おそらくほとんど来ないだろう。昼食が終わつて、さて展示でも見
よう、なんてやつあまりいないだろう。午後一から体育館で演劇部
の舞台もやるわけだし、こちらにはあまり人は流れてこないと思つ。

もともとやる気などないわけだし、人が入らなかつたからと言つ
て、別に困ることもないのではつきり言つてビリでもいい話では
あるのだが、

「…………」

一つだけ問題があつた。それは俺の相方に由来する。

「…………」

昼間、若崎たちに言つたが、今回も相方は戸塚結衣だ。しかも戸
塚一人だ。残念ながら三原はいない。なので、会話が成立しないの
だ。

客が全くいないとなると、手持無沙汰だし、何しろ気まずい。客
がいれば、気まずさもないし、一応仕事もあるからこんな気持ちに
ならなくてもいいのだが。……とりあえず話しかけてみるか。

「戸塚」

「ひや、ひやあいーな、なんでしょうか？」

いきなり話しかける気を失くしてしまった。そんなに驚かなくて
もいいだろうよ。俺のほうが驚いてしまう。

「あんた、昨日も受け付けやつていなかつたか？」

「え？ ああ、や、やつたけど、何で？」

「すでに昨日やつたんだつたら、今日は一回もやらなくてよかつた
んじやないか？」

「え？ でも、他にやることもなかつたし、そ、それに……」

やはり暇なのか。しかし、暇だからと呟つて、受付をやつとも
思わない。俺がなぜ今日一回も受け付けをやつているのか、という
と、昨日一切手伝いをしていないからだ。昨日何かしらの仕事をや
つていたら、今日は朝の一回でお役御免とばかりに、他のことをし
ていたと思う。特に用事がなくて、な。

「…………」

そしてまた沈黙。会話とは、こんなに難しいものだつたのか。い
や、俺とて自分の「ミコニケーション能力の低さを認めている。し
かし、これほどまでに会話が続かないと、さすがにショックを隠し
切れない。しゃべることを苦手としている一人なのだから、仕方が
ないと言えば仕方がない。諦めるべきか。すると、

「な、成瀬君は何で一回も受け付けやつているの？」

あからさまに無理矢理ひねり出したような話題。なんだかかわい
そつになつてくるね。俺も含めて。

「俺は押し付けられたんだよ。昨日はクラスの手伝いを何もやっていないからな。だから今日だけでもしっかり手伝え、つてことだろうよ」

「あ、あー、そっか。そうだね！」

「…………」

「…………」

あー、もう駄目だ。どうにもならない。ここまで会話が下手くそな一人が集まつていつたい何ができるだろうか。何もできないだろうよ。どうせ俺は会話が下手くそだよ。情けないが、これは認めざるを得ないようだな。

こんな感じで、俺と戸塚はぼつぼつと会話を続けた。そんな苦痛な会話を一十分ほど続けていると、徐々に客が入り始めた。こうなると、来客の数に反比例するように気まずい空気は減少していく、無理矢理しゃべる必要性も感じなくなつてくる。その辺りから、俺と戸塚の会話は激減していった。

しかし、所詮は高校の展示。常に客がいるはずもなく、しばらくすると客は全てはけ、またしても一人きりになつてしまつた。すると、

「あ、あのさ、成瀬君！」

待つてましたと言わんばかりに、戸塚が話しかけてきた。なんだ、いきなり。

「どうかしたのか？」

「う、うん。わ、私ね！」

と、ややテンション高めで、嬉々とした表情を浮かべた戸塚が元気よく話しかけてきたのだが、気になるその内容は聞くことができなかつた。

「結衣ちゃん!..」

名前を呼ばれた。もちろん俺ではなく、戸塚の名前だ。戸塚は喉まで出かかっていた会話を飲み込み、声のほうへ視線を移動させる。すると、

「彩衣ちゃん!..」

そこには同じ年くらいの女子がいた。友人だろうか。俺は全く覚えがないので、うちの高校の同学年ではないだろう。先輩か、あるいは中学時代の友人か。どちらにしても、名前で呼び合つほどの仲なのだろう。見た目だけだと、年上に見えるな。

「ど、どうしたの? こんなところに!..」

「ん? どうしたの? 遊びに来たに決まってるじゃん。一度、来てみたかったんだよね!..」

これで決まりだ。うちの高校じゃないな。

「で、結衣ちゃんは何をしているの?..」

「何つて、展示の受付だけ?..」

「ふーん。それっていつ終わるの?..」

俺を差し置いて、二人は会話を重ねていく。こういう時、何をしているのが正解なんだろうな。『誰?』とか『受付は十四時までだよ』とか言って、二人の会話に参加するのが、正解なのだろうか。

だとしても、俺にはできないな。とりあえず視線を外して黙つているのが吉だな。というか、それしかできない。

「受付は十四時までだよ」

「じゃあそのあと、高校の案内してよ。結衣ちゃんの高校がどんなところか見て回りたいし」

「うん、いいよ」

やけにこここの高校に興味津々なやつだな。そんなに興味があるなら、うちの高校に来ればよかつたのにな。いや、来たくても来れなかつたのかもしない。そう考えると、未練からの興味なのかもな。しかし、今更感も無きにしも非ずだ。ま、どうでもいいな。それに、さすがに聞きすぎだらう。他人の会話を盗み聞きするような趣味はない。込み入った内容ではないし、聞き耳を立てているわけではないが、何となく後ろめいたので、俺は興味を教室内の風景に移した。また、徐々に客が入ってきたな。と言つても、特別やることなどないのだが。

それからも二人はしばらく会話を紡いでいた。内容は聞いていたがつたが、とにかく楽しそうだったので、やはりそれなりに仲のいい友人なのだろう。一人の様子を見ていて、ふと思いつつかぶ。そういえば、うちの中学校の同級生とか来ているのだろうか。俺は特別仲のいい友人はいないが、麻生なら誰かと会つてているかもしれない。そう考えると、文化祭というのは軽い同窓会になるようだな。確かに会いやすい状況ではある。今のところ、誰かに会つたりしてないが、見かけたら声をかけてみるか。

「ところで、」

俺がぼんやり考え事をしていると、

「そここの男は結衣ちゃんのクラスメート?」

そここの男とは、おそらく俺のことだろ?。学校のことと加えて、生徒にも興味を持ち始めたようだ。というか、戸塚の生活そのものに興味があるのかもしれないな。もしかしたら、この女子は戸塚のことが好きなのかもしれない。ま、冗談だが。それにしても、初対面の人間に對して、その男、呼ばわりするとは、教育がなっていないな。

「あ、えっと、うん。同じクラスの、成瀬君」

紹介しても、もう悪いが、俺はどうすればいいんだ。とりあえず、何かしらの挨拶めいた言葉を吐いておいたほうが吉だな?。

「どーも」

すると、

「ふーん、成瀬君、ねえ」

よく分からぬリアクションを見せた。なんだ、どうこう意味だ? そいつは一秒ほど俺のことをじつと見た後、

「初めてまして、成瀬君。あたしは戸塚彩衣です。姉がお世話になっています」

戸塚、彩衣。そして、姉。つまり、

「あんた、戸塚の妹か?」

「うん。そうだよ」

「つてことは、年下か」

「もちろん。今は中学三年だよ」

驚いた。まず姉妹というところに驚いた。全く似ていなか。パツをよく見れば似ているかもしないが、パツと見、まるで似ていない。そして、戸塚が姉、というところに驚いた。どう見ても、戸塚のほうが妹だろう。戸塚結衣のほうが背が低い、ということもあるが、戸塚彩衣が大人びている。中学三年だと? 見えないだろう。

「で、他のクラスメートはどうしているの? 噂のあの人、見てみたいんだけど」

「こ、こ、こ、何言っているの?」

それにしても仲のいい姉妹だな。おそらく家でもこんな感じなのだろう。正直、クラスメート以上に仲良く見える。

「ま、いいや。とりあえず、何か食べに行こうよ。あたし、何も食べてなくつてや。臨時収入が入ったから、おいつちやうよ。成瀬君も来る?」

「ちょ、ちょっと彩衣ちゃん?」

俺は遠慮させてもうぜ。二人と一緒に行動する気にはなれないな。パツと見は大人びているが、中身は子供だな。俺は子供が苦手なんだ。

「臨時収入つて何? お母さんから、お小遣いでももらつたの?」

「これまた子供のエピソードだな。戸塚家では文化祭があるからつて、小遣いがもらえるのか。微笑ましい話だと思つて聞いていたら、

「いや、さつき財布拾つた」

全然微笑ましくなかつた。

「ダメだよ、持つてきちゃー那人、絶対困つてゐるよ」

この辺りはさすがに姉だな。戸塚が常識人でよかつた。

「大丈夫だつて。中身あんまり入つてなかつたし」

なおさらかわいそうだ。といふか、そういう問題ではない。彩衣は自分のカバンから、拾つたらしい財布を取り出した。男らしい、黒くてでかい長財布だ。

「これ、どこで拾つたの？持ち主探さないと
「平氣だつて。落としたほうが悪いんだよ」

そういうてやるな。間違つていなが、落としたくて落としたわけじゃないんだし。それに、お前が言つていいセリフではない。

「いいから。拾つた場所を教えて
「むー。体育館だよ。舞台のそでで拾つた」

舞台のそでだと？お前、そんなところで何をしていたんだ？ま、それは置いといて、確か、今時間は演劇部の演目がやつてゐる時間だ。そうなると、舞台そでにあるものは、演劇部の物である確率が高い。直接演劇部の連中に渡してしまつてもいいが、それも面倒だ。

「とりあえず、文化祭本部に届けよ」

あとは連中がどうにかしてくれるだろう。

「うん。 そうだね」

戸塚は納得してくれたが、

「えー、ちょっと待つてよ！ あたしが拾つたんだけどー。」

彩衣のほうは納得してくれなかつた。

「これは歴とした犯罪だ。警察に突き出されたいか？」

「盗んだわけじゃないよ。あたしは拾つただけだし」

「刑法245条『逸失物等横領罪』」

「何よ、それ」

「拾つたものを横領する」とだ

俺は適当に説明すると、彩衣から財布を奪つた。失礼、と心の中で断りながら、中を見る。個人を特定できるものはないな。他には、レシートやポイントカードの類が無駄に入っている。肝心の金銭は、彩衣が言つていたようにほとんど入っていない。かなりルーズな人間らしい。とりあえず、こいつは届けてやらないと。

「何か食べたきや、自分の金で買え。もしくはお姉ちゃんにねだるんだな」

その後、十四時まで一応受付の任務を全うしてから、財布を持って文化祭本部へ向かつた。

受付を次の係りの連中に引き継ぐと、俺たちは文化祭本部に向かつた。俺たちというのは、俺と戸塚姉妹の三人である。正直俺一人でもよかつたんだが、戸塚の、

「彩衣ちゃんに最後まで責任を取らせたい」

「どう真摯な願いを受け入れ、了承した。学校ではやや頼りない戸塚だが、家ではしつかりしているらしい。姉として、きちんと妹の教育をしているようだ。それでもこんな風に育つてしまつたのは、やはり戸塚が最後の最後で甘やかしてしまつているからだろう。戸塚らしいと言えば、戸塚らしいな。」

文化祭本部に到着すると、彩衣が係の女生徒に話しかける。

「すみません。これ、落し物です」

「ありがとうございます。お預かりしますね」

マニユアル通りの反応で対応する係の女生徒。一応一言声をかけておぐか。

「財布の失せ物の届け出は来ているのか?」

「えーっと、つい先ほど来ますね」

落し物名簿なるものを見ずに、係の女生徒が答える。おれらが彼女が応対したのだろう。

「黒の長財布を体育館で失くした、というものでした」

「完全にビンゴだな。これで、問題は解決だ。

「私たちで届けてきます。お名前は解りますか？」

言い出したのは、戸塚、えーっと結衣のほうだ。妹の問題は自分の問題とでも思っているのだろう。今日の戸塚がいつもと違つて見えるのは、氣のせいではないはずだ。

「えっと、名前はうかがつていませんね。というか、まだ届いていない顔を伝えたら、すぐさま出て行つてしまつたので、何も分かりません」

「……」

かなり怪しいな。何も言わずにしていくとは。自分の物だったら、そんなことはしないだろう。ただの人見知りで恥ずかしがり屋、ということではあるまい。何か後ろめたいことでもあるのだろうか。

「うちの生徒だったか？」

「はい。一年女子でしたね」

ここに来たタイミングが良かったのだろう。受け付けたこの女子生徒も、記憶に新しいため、細かいところまでよく覚えている。しかし、なんだか面倒になつてきたな。それにしても、

「女子、ねえ」

黒くてでかい長財布なんて、完全に男物だろう。俺は信じて疑わなかつたのだが、探しに来たのは女子か。誰かに頼まれたのか。だとしても、自分の名前くらい明かさないと、見つかった時に連絡し

よつがない。怪しこじとじの上なこな。

「あの、成瀬君……。どうしましようか？」

俺に聞かれてもな。どうあえず、こじこじてもしようがない。財布は一応こじに預けるとして、こじの後どうするか、だな。

何やら嚙み込まれたらしことを薄々感じ始めた俺は、ため息を吐いた。どうしてこじいろいろなことに巻き込まれてしまつのだろうか。いや、待て。考えてみれば、まだ逃げ出すことは可能だ。財布を預けてしまえば、とりあえず失せ物探しからは解放される。さつたとこじを離れよう。しかし、

「すみません。お、成瀬じゅん

やつは問屋が鉗せないらしい。

「あと、丘塚さんだつけ？隣の子は知らないな。お三方、難しい顔してどうしたの？誰か落し物もしたの？」

麻生だ。今日初めて顔を見たが、相変わらず楽しそうでいらっしゃいね。

「お前こじ、こんなとこにどんな用だ？」

「あー、財布失くしちゃつた。探しに来たわけ」

嫌な予感がする。いや、もう予感なんて曖昧なモノじゃない。これは確信だ。俺はもう逃げられないらしい。

「一応聞くが、財布ってどんなやつだ？」

「黒の長財布」

「」こんな感じのやつか？」

俺は手に持つていた例の長財布を見せる。

「やうやう。まさにそんな感じのやつだよ。とこいつか、全く同じじやないか。それ、誰の？」

ビンゴだな。

「おやうへ、お前のだ
「は？」

「なるほどねえ」

俺たちは、文化祭本部にいた受付の女子生徒に事情を話し解放してもらうと、麻生を交えた四人で、TCCの部室に来ていた。俺たちが麻生の財布を持って、文化祭本部にいた経緯を話し終えると、麻生は納得の領きを返し、

「結局どうこいつなの？」

納得はしたようだが、理解はできていなかつたらしい。麻生の質問に答える前に、麻生に質問をしなければならない。

「財布を失くしたのは、いつだか分かるか？」

「いや、正直分からんな。学食で昼飯を食べようとして、財布がないことに気づいたんだ。だから昼の時点でももうなかつたね」

「単純に落とした可能性は？」

「低いと思うぞ。パフォーマンス前にカバンに仕舞つたところまで覚えているんだ。だから落とした、というのは考えにくい」

「カバンはどこに置いといたんだ？」

「ああ、パフォーマンスの間はステージ裏に。他のみんなも一緒に置いてあつたんだけど、他に盗られたやつはいなかつたな」

なるほど。で、彩衣のほうは、

「あたしはさつき演劇部が舞台やつていてるときに、舞台のそでで拾つたの」

時間に食い違ひが出てている。ま、二人とも嘘はついていないだろう。根拠はないが、嘘ついているように見えない。それに、財布を探してやつてきた女子生徒のことを鑑みると、答えはおのずと導き出せる。

「これは一重窃盗だな」

麻生は午前中に財布を盗まれている。盗んだ人物は、先ほど財布を探して文化祭本部に來ていたという女子生徒。その女子生徒は、盗んだ財布を、今度は体育館の舞台そでで落とした。そして、それを拾つたのが戸塚彩衣だ。で、今に至る。

「じゃあ話は簡単だね。演劇部に行つて、『犯人はこの中にいる』つてやればいいんでしょ？」

十中八九、犯人は演劇部の連中だろ。彩衣の言い回しは置いと

いて、そうやるのが一番単純で簡単な方法だ。俺も、それに賛成だ。さつきの受付係の女子を連れて行けば、おそらく特定できるはずだ。しかし、

「ちょっと待てよ。そりや状況証拠にしかならないだろ？ それに探しに来た女子を犯人だと言い切るのはいささか早計だと思うぜ」

全く以てその通りだな。加えて、演劇部員だというのも、百パーセントではない。全て、可能性の話でしかないのだ。『おそらく』とか『たぶん』で犯人だと言い切るのは危険すぎる。それに、

「それに、今回の窃盗は、単純な金品狙いじゃないと思うぜ。だって、財布からは金が抜かれていなかつた。普通、財布盗んだら金だけ抜いて、あとは捨てるはず。見つかったら、言い訳ができないからな」

それも、その通りだ。そして、それ以上におかしいのは、盗んだ財布を探して、文化祭本部にまで足を運んでいたことだ。もし、その女子生徒が犯人ならば、そんな目立つた行動をとるのはおかしい。盗んだ財布を落としてしまつたから、探す。確かにせつかく盗んだ財布を手放すのは惜しい。しかしそれ以上にリスクが高い。犯行後、犯人は目立つた行動を避けるのがセオリーだ。それなのに、彼女は探しに行き、あげく文化祭本部にまで足を運んでいる。普通の窃盗では考えられないことだ。

ま、それは置いといて。

「お前の考えは理解できた。それで、お前はこのあとどうしたい？」

俺が聞くと、麻生は嫌な感じでニヤッとして笑い、

「決まつてんだろ。探偵じつこは男のたしなみだぜ」

麻生のガキっぽい発言を受けた俺たちは、さっそく部室を飛び出し、捜査に赴くことになった。文化祭が始まる前から、忙しい、と豪語していた麻生は、言い出しつべのくせにひとまず十五時までしか捜査に参加できないうらしい。何でも、十五時からはクラスの店番があるようだ。全くいい身分だよな、こいつ。

「そりいや、俺の財布を拾ってくれたのは、戸塚妹だつたよな？」

俺に聞いてきたようだつたが、俺が答える前に、

「そりや。本当は使つてやうつかと思つたけど、持ち主のことを考えて、思ひとどまつたの。感謝してよね」

どの口が言いやがるんだ。財布を取り出したときは、自分の釣果を見せびらかすように自慢げだつたじゃないか。しかも、彩衣は普通に使いこもつとしていた。それを俺と戸塚で止めたんじゃないか。全く、とんでもない妹だな。さぞかし姉も手を焼いているんだろう。俺は横目でちらりと戸塚を見る。すると、慈愛に満ちた表情で妹のことを見ていた。おそらくかわいくてしようがないのだろう。それは、わが子を愛する母親のようだつた。

俺の視線に気づいた戸塚は、はつとして、顔を真っ赤にすると、

「あの、すみません……」

なぜだか謝られた。彩衣の態度は置いといて、

「あんた、本当に妹が好きなんだな」

「すみません」

謝る必要など、これっぽっちもない。姉妹仲がいいのはいいことだ。親とも友達とも違う存在。自分に一番近い存在だと言つて間違いないだろう。それが同性なら、なおさらだ。

「しかし、似てないな。あれだけ大雑把で適当で、天真爛漫な性格。とてもじゃないが、あんたの妹には見えない」

「よく言われるの。私は彩衣ちゃんが大好きで、いつも彩衣ちゃんみたいになれたらな、って思つてているの」

ま、戸塚は大人しいからな。明るい性格にあこがれる気持ちは理解できる。俺とて、たまーに麻生の性格をうらやましく思う時がある。しかし、

「あそこまで底抜けに明るくなる必要はないぞ。大人しくて、慎み深いのは日本人の美德だと思え」

戸塚結衣が、彩衣みたいになつてしまつたら、何となく残念だ。おそらく一人を足して二で割るくらいがちょうどいいのだろう。

「あ、ありがと……。その、嬉しいです、すいべ

喜んでもらえたなら、幸いだね。

「よし！捜査前に何か食おうじゃないか。腹が減つては何とやらだ。キミ達三人に敬意を表し、俺がご馳走してやる」

前方を歩く麻生が、振り返ってこんなことを言い出した。おそらく彩衣にそそのかされたのだろう。麻生は単純なやつだ。簡単に口車に乗せられてしまつ。

「そつは言つても、麻生。お前の財布、ほとんど金入つてなかつたぞ」

「そんなことねえよ。千円は入つてゐる。それに、知つてゐるか、成瀬」

千円程度で自慢するんぢやない。それに、嫌な言葉を吐くんぢやない。

「今、うちの学校は『文化祭の七不思議』つてやつが流行つてゐるんだ。その中の一つに、文化祭で他人のために出費すると、その後一年間、倍以上の謝礼が返つてくるらしい。何でもその昔、資金不足で文化祭ができなかつた頃、一人の生徒が自分のポケットマネーから出資して、文化祭を開催したらしい。その後出資した生徒は文化祭で培つたマネージメント力を生かして、起業して大成功を収めたらしい」

それ文化祭関係ないだろう。単にそいつが才能を努力で磨いた結果だろう。そいつから言わせたら、奇跡なんて言葉で片付けられちやたまつたもんぢやないはずだ。それに、一生徒が文化祭の費用全額負担つて、どういうことだよ。何者なんだよ、そいつ。ま、どうせ作り話なんだし、こんな下らないことに突つ込みを入れてもむなしいだけなのだが、どうしても作り話のクオリティーの低さに物申したくなつてしまつね。

「へえ、いい話だね！ 素敵！」

「そんな話があるんだね。じゃああたしもおひつかやおうかな！」

こんな時だけ意見を同じくするなよ、戸塚姉妹。似なくていいと
ころが似てしまつたな。一人とも残念すぎるぞ。

ともかく、これで五つ目か。残り二つになつてしまつたな。残り
二つは、どうかまともなモノであつてもらいたいね。

いつして、文化祭の七不思議に頭を悩ませながら、俺は捜査を開
始した。

15:00~16:00(前書き)

遅くなりました。申し訳ないです。

十五時になると、麻生はいつも通りのにせけ面で、

「じゃあ、捜査よろしく。俺は俺のほうで情報を集めておげざ」「集めるつたつて、お前は店番だり。どうするんだよ」

麻生は「ともなげ」、

「演劇部の連中に話を聞いてみるよ。世間話の延長でな」

「つむ。こいつ、ずいぶん簡単に言いやがる。俺では到底できない」とだ。明るく気さくな人間は、それだけで得をしてくると思つね。これは社会性のない人間の僻みだと思ってくれ。

「なんか分かつたら教えてくれ。捜査も楽しいが、事実関係も気になるんだ。なんてつたつて、俺は被害者だからな」

ずいぶん楽しそうな被害者がいたもんだな。

「お前も何か分かつたら、教えてくれ」

「むりんだ。ワトソン君」

何になりきつていいのか、丸分かりだな。俺は医者でもお前の助手でもないぞ、と突つ込みたい気持ちは山々だが、麻生のほうは時間もなさそうだし、適当に頷いてこの会話を終わらせた。

「あー、俺のサイフは引き続きお前が持つてくれ。どうせこの時は使わないし、もう盗まれたくないからな」

「ああ。分かつた」

店番が終わつた後、また集合することを約束すると、俺たちは別れた。

さて。これから何をしようか。正直乗り気ではないし、一番乗り気だった人間もいなくなつてしまつたので、かなり手持無沙汰になつてしまつてゐる。とりあえずこの場にいる同朋に尋ねてみるとよい。

「これからどうする?」

「え? わ、私ですか?」

同朋その一。戸塚結衣。

「私は、別に……。でも少しだけおサイフ盗んだ人のことが気になるかな。あ、でも、成瀬君がいやだつていうなら、全然いいんだけど……」

意見なのが提案なのか、それとも単なる独り言なのか。一応願望らしき発言をしたのだが、いまいちその真意が分からなかつた。ま、慎み深い戸塚のことだ。自分の願望らしき発言をできただけでも十分だらう。いつもならば、『みんなに会わせる』的な発言をしていたところだ。

戸塚結衣の意見(願望)は理解した。では、もう一人の同朋の意見はどうだらうか。

同朋その一。戸塚彩衣。

「うーん、犯人探しもいいけど、あたしはもつと文化祭を見て回りたいな。まだ全然見てないし。せつかく結衣ちゃんの高校に来たんだから、結衣ちゃんの友達にも会いたいな」

もつともな意見だ。戸塚彩衣はうちの高校の文化祭に来たのだ。何も犯人探しに付き合う必要はない。ま、その文化祭に来て事件を起こした張本人であるのだが、形の上では事件は解決し、被害者も彩衣を恨んだりしてはいない。こいつは解放してやってもいいかもしないな。とはいって、こいつだけ解放しても、かわいそうかもな。彩衣は、姉である結衣を追ってきたのだ。そして、その目的は結衣の高校を見ることと、その高校生活を垣間見ることだ。となると、彩衣のサポート役兼案内役を結衣に任せるのが最善かも知れないな。

「じゃあこのあとは別行動、二手に分かれる」としようか

「一手とは、当然俺と戸塚姉妹、の一手である。

「犯人探しは基本的に俺が引き受けるから、戸塚は妹を案内してやれ」

「え？ あの……？」

突然の宣言に、混乱したように言葉を詰まらせる戸塚姉。一応言つておくか。

「犯人探しがしたいなら、案内しながらすればいい。探すって言つたって、どうせ聞き込みくらいしかできない。文化祭をぶらぶらしながら、知り合いに声をかければいい」

「そう、ですね……」

結衣が発した言葉は、表面だけとらえれば納得、了承したように

聞こえた。しかし、表情・声色・雰囲気を鑑みれば、一目瞭然。明らかに不満がありそうだった。

「一応言つておぐが、これは間違つても命令じやない。何か不満があるなら言つてくれ

俺の発言に対して、反射的に顔を上げ、何か言おうとした結衣だつたが、言葉が出てこず、結局黙り込んで俯いてしまつた。なんだろ? うな、俺が悪いのか?

俺はビビつしらいいのか、判断できずにいた。一応反論異論はない。なので、決定を下して、別行動をとることはできる。しかし、どう見ても心の中に反論を抱えているらしき戸塚結衣を田の前にして、俺はそんな決定を下せるほど心が強くない。

さて、どうしたものか。じつしている時間ほど無駄なものはないわけなのだが。

「じゃあさ、」

口を開き、この空気を打開したのは、この場における最年少戸塚彩衣だ。

「成瀬君が言つたことを二人でやればいいんじゃない? 結衣ちゃんはあたしを案内して、成瀬君は聞き込みをやる。これつて、別行動じゃなくてもできるよね?」

言われるまでもなく、もちろんその通りだ。しかし、俺としては、何も効率だけを考えていたわけではなく、仲睦まじい戸塚姉妹の間に、俺が割つて入るような状況を回避する意味も込めて別行動を提

案したのだ。

と、俺の考えを改めて表明しようとしたのだが、

「そ、そりだね！それがいいよー。そりしそうー。」

結衣の、無駄に元気で大げさな同意を聞いたら、そんな心遣いは無用だという結論に至った。しかし、なんだってそんな大げさな同意をしたのだろうか。ほら見る。おかげで、戸塚の声を聴きつけた連中が、何事かと色めきだつているじゃないか。

「うー、ごめんなさい……」

周りの視線気が付いた結衣は、いつものように小さくなってしまった。同時に、興奮して大きな声を出してしまった自分を、今更ながら恥じたように、顔を真っ赤にして俯いた。

無駄に目立つてしまつたことはさておき、結衣の発言によつて俺たちのスケジュールが決まった。

「じゃあ適当にじぶらつくなよ。戸塚妹はどうに行きたいんだ？」
「え？ いいの？」

この発言は彩衣の物で間違いないのだが、隣で結衣も同様の質問を口にした。その表情で俺を見ている。俺は、そこまで驚かれるような発言をした覚えはないぞ。考え方もいたつてシンプルだ。いいの、と聞かれれば、即座に首肯する。

先ほども言つたが、結衣は俺が知つてゐる中でもトップクラスに慎み深い。他人に対して、自分の意見を押し付けることは絶対にし

ない。自分の意思を表明することも滅多にない。そんな結衣が、俺に進言したのだ。そうしよう、と。その行動にどれほどの決意があるのか。俺には計り知れない。

「俺もまだ文化祭を楽しんでないんだ。できれば、誰かに案内を乞いたいところだつたんだ」

「なるほど。じゃあ結衣ちゃん、案内役よろしくね」

しばし呆然としていた結衣だったが、意味を理解すると、

「う、うん！ 分かった！」

と、またしても元気よくうなずいた。

指針が決まったところで、まず最初の行先を決める。

「成瀬君は、どこが行きたいところある？」「特にないな」

即答した俺に対して、結衣は少し困ったような表情を作った。俺の意見など、適当に捨て置いてもらいたいね。それより文化祭を満喫したいという願望を語った、実妹の意見を聞いてやつてくれ。

「あたしはプラネタリウム見たいな。これって、結衣ちゃんたちが作つたんでしょう？さつきは展示しか見れなかつたし、とりあえずそこの案内してよ」

「うん。分かつた。あの、成瀬君もそれでいいかな？」「構わんよ」

俺は最初から何でもいいのだ。犯人探しだって、正直どうでもいい

い。

そうして、我々奇妙な三人組は、我がクラスに向かつた。

目的地に到着するまでも、戸塚彩衣は文化祭を楽しんでいた。道中の発表・展示にことごとく興味を持ち、その度に寄り道をしていた。

すでにいくつかの展示やら発表やらを見て回ったのだが、飽きずにまた新たに一つ、どうやら興味を持ったようだ。その教室には大きく『占い館』と書かれていた。

「ねえ、ここ見ていただきんだけ?」

今更とやかく言わない。好きなだけ寄り道すればいい。どうせプラネタリウムは逃げやしないからな。というか、完全に道が違うから、もう目的地なんてあってないようなものだ。俺がここにいる理由もあってないようなものだな。

しかし、

「.....」

占い、ねえ。あまりいい思い出がないな。俺は信じていないといふのに、なぜこれほどまでにさまざまな思い出があるのだろうか。今年度の初めにやたら振り回された思い出があるな。あれは大変だった。もう一度と、占いなんかに関わりたくない。

と、そういえば……。

「あー、あんたがこんなところにいるなんて、まだ懲りていないのかしら。それとも、快心でもしたのかしら。だとしたら、もう一度考え直したほうがいいわよ」

会った途端になんてこと言つやがる。俺が自ら占いに近づくとはないね。俺の意志でなくとも、近づきたくないね。懲りてないだと?「冗談言つたな。もうこいつはつだ。

「考え直すも何も、占いに興味はない。今までも、今も、これからもな」
「あ、そ。安心したわ。といつも気が狂つたのかと思つた

口が悪いにもまどりがあるな、この娘。といつもひどいこの意味だ?気が狂う兆しがあつたとか?ならば、少しあは氣を遣つてもらいたいね。

そこに現れたのは、TCCの唯一の一年。若崎以上に歯に衣着せないこの女は、泉紗織で間違いない。TCCが誇る、占い少女だ。半年ほど、占い少女であることをすつかり忘れていたが、この度めでたく復活したらしい。有志で行つてここの占い館の一員である。

「よく見れば、また違う女を連れているわね。全くいいじ身分だこ

と

「何かとんでもない誤解をしていいだから言つておぐが、ただのクラスメートとその妹だ

「こ、こんだけは

「どーもー」

俺が紹介したと勘違いした戸塚姉妹は、皿口紹介を始める。

「あの、成瀬君のクラスメートをやらせていただいています、戸塚結衣と申します。成瀬君にはことある「」とお世話になつており、今も、あの、姉妹ともども「」迷惑を……」

恥ずかしいからやめもらいたい。やらせていただいている、つてなんだ。戸塚に迷惑をかけられたことはあまりないぞ。確かにコニコニケーションがとりにくいとは思つてゐるが、それに関しては俺のほうにも問題はあるわけで……。とにかく意味不明な持ち上げ方はやめてもらいたいね。どう考へても誤解を生みそうだ。戸塚は俺のことを、神か何かと勘違いしているんじゃないだろうな。

「あはは。妹の彩衣でーす」

姉とは一転、かなり能天気な感じで名乗る彩衣。いや、本来ならこんな感じで十分なのだ。そもそも自己紹介なんて必要ない。ただ、ばつたり会つただけなのだから。

「ふーん……」

戸塚姉妹の紹介を聞き、じっくり観察した後、姉は意味深な感じでうなずいた。なんだ、嫌な感じがするな。こいつ、絶対あらぬ誤解をしているに違いない。

「ま、いいわ。あんたがどんな知り合いと付き合おうと、私に被害がなければ好きにするといいわ。で、占いに来たんでしょ。私でよければ占つてあげるけど」

自分勝手な娘だ。自分から言つ出したくせに、一方的に会話を打

ち切りやがつて。

姫は丁寧の中では、俺の次に常識人である。言っていることはたいてい的を射ているし、突飛な発言をしたりもしない。ただ、わがままでも口が悪い。姫は一年で、最年少だ。にもかかわらず、誰に対しても敬語を使つたりしないし、俺や麻生に至つては先輩とも呼ばれない。

俺や麻生は上下関係にうるさくないからいいものの、将来はもつと年長者に対して気を遣えるようになつたほうがいいぞ。

姫は先頭切つて占い館に入つていぐ。俺たちもそれに続く。中はよくある占い館のイメージなのか、若干照明を落としてある。暗幕カーテンを使って外からの光を遮断し、蛍光灯にも、セロファンで明かりの色を調整している。実際とは違うのだが、ま、万人受けするイメージということなのだろう。

机や段ボールなどで仕切られた一つの小部屋に案内された俺たちは、置いてあつたイスに腰かけた。その対面に占い師であるところの姫が座る。

「じゃあさつそく、と言いたいところだけど、」
「何があるのか？」

何かと思つたら、姫は怪しく微笑んだ。ヘンゼルとグレーテルを見つけた魔女のようだ。どう見ても樂しいことにはならないような気がする。

「あのや、わざわざいつに現在進行形で迷惑かけているつて言つてたけど、何があつたの？」

姫が話しかけたのは俺ではなく、戸塚結衣のほうだった。

「何で、それをお前に話さなければいけない」

「あんたに聞いてないでしょ。戸塚先輩に聞いているのよ。ねえ、教えてくれない？」

「え？ あの……」

戸塚は困惑し、俺を横目でちらりと見た。俺の許可が必要だとでも思っているのだろうか。そういう態度はやめてもらいたいね。戸塚自身に悪気がないのは分かっている。しかし、どうにも体裁が悪い。何か俺が威圧しているように見えるではないか。クラスメートはどう思っているのか、せいぜい気になるところだ。

「戸塚の妹がサイフを拾ったんだ。それを戸塚妹がネコババしようとしていたから、阻止して文化祭本部へ持つていったんだ。そしたらそのサイフが盗まれた麻生のものでな。今、情報を集めているんだ」

あんたに聞いていない、と言われたにもかかわらず、俺が話したので、何か嫌味を言われるだろうと想っていたのだが、姫はさらといやらしい笑みを深くして、

「へえ。それで、そのサイフは？ あんたが麻生に渡したの？」

「いや、まだ俺が預かっているが

俺が答えると、途端にがっかりした表情になる姫。そして、

「何だ、面白くない

何で麻生にサイフを返していたら、お前が面白い気分になるんだ。

全く理由が分からぬぞ。

「じゃんな話知つている?」

嫌な感じで切り出した姫。あー、これはいろいろ聞き覚えのあるフレーズだな。

「文化祭の七不思議つて知つてる?」「よく知つている」

「残念ながら、大当たりだ。」

「へえ。なら話は早いわ。文化祭の最中に大事な物を失くした人に、その失くした物を届けてあげると、とても親密になれるみたいよ。何でもその昔、文化祭の最中に大量の現金が入ったサイフを失くした女性がいたらしいの。結局とある男性がそのサイフを届けてくれたらしいんだけど、その男性は盗むことはおろか、謝礼も請求せず、名前も明かさずに立ち去ろうとしたの。その男性の紳士な姿を見た女性は一目で恋に落ちてしまったらしいわ」

ふむ。今回の作り話はなかなかのクオリティだな。まず間違いなく、今まで一番まともな話だろう。それで、なぜ姫が『面白くない』と表現したかと「うど」

「もし、あんたが麻生にサイフを渡していたら、とても親密になれたのに、残念ね」

別に残念でも何でもない。これ以上麻生と親密になつてどうするんだ。現状で十分だ。それに、姫はいつたい何を期待しているんだ。いや、分かっている。先ほど戸塚姉妹に言つたセリフからも、一目

瞭然だ。こいつは俺が困っている姿を見たいだけなのだ。全く、いい性格だな。

「へえ。それは、いい話だね」

「うん。七不思議はいい話が多いね」

姫の下らない冗談など、全く聞こえていなかつたとばかりに、戸塚姉妹は仲良く雑談している。よく考えたら、サイフを拾つたのは俺ではなく、彩衣だぞ。だから麻生と親密になるのは、彩衣のはずだ。

それを姫に語りと、

「大事な物を拾つてあげると、とは言つてないわ。届けてあげると、と言つたのよ。だから、あんたの手から麻生に渡れば、親密になるのはあんたなの」

それは屁理屈なのではないのか。考えたのが誰だか分からぬが、それを意図して、届ければ、といつ言い回しを使つたかどうか怪しいことこの上ないね。

「さ、ぐだらない話はここまでにして、占いを始めましょ。どうちが受けれるの?」

これまた言い出したのは姫だったのだが、先ほど同様勝手に話を切り上げて、本題に戻つた。本当に自分勝手なやつだ。しかし、姫の勝手に不満を感じていたのは俺だけだったようだ、

「はーーーあたしが受けますーーー」

「元気よく彩衣が手を上げる。

「や。じゃあ私の正面に座つてくれる。で、手を出してくれる」

「はーい」

彩衣は言われた通り、姫の正面に座り、手を差し出した。どうやら姫は手相占いをするようだ。

「手相占いか。あたし、占いつてあまり信じないんだけど、手相だと結構信憑性あるような気がするんだよね」

見てもらいながら、姉に話しかける彩衣。ま、自分の身体的特徴から読み取る占いだからな。血液型や星座占いよりは信憑性があるような気がするのは、俺も理解できるところだ。だが、結局占いの域を出ない。科学的な根拠がつけられるようなものなのだ。絶対はない。当然だろ？。

「結局占いは絶対じゃないのよ。占いつていうのは、『当たるも八卦、当たらぬも八卦』と昔から言われるようじ、初めから、必ず当たるつていうものじゃないの。だから当たる当たらないで文句を言うのはおかしいの」

今年度の初めに、占いをもとにいろいろやっていた姫だが、とある計画の道具として占いを選んだわけではなく、最初から占いに興味を持っていたのだろ？。

「占いの歴史は古く、深い。王や貴族たちより権力を持つていた時期もある。それはなぜか。人間は漠然とした不安を嫌うから。それは現代でも一緒。だから今では占いが溢れているし、かなり身近になってきてるでしょ。要は当たる当たらないというより、その人

の不安が拭えればいいのよ

「すいぶん身勝手なこと言つてこりな。占いを受ける人間がそう思つていいのはいい。しかし、占いをする側の人間が言つていたら、お前の占いは適当なんぢやないか、つていう不安で押しつぶされそうになるね。占い師が新たな不安を呼んでどうする。ただ、言わんとしてこり」とは、的を射ている。

「確かにそうかも。だつて占いの結果つて、その時盛り上がるだけで結局忘れちゃうしね」

「そうだね。信じるもの、よかつた内容だけだもん」

普通はそうだろうな。占い結果を頭から全て信じる人は少ないだろひ。

「元来占いは災いを避けるためにやつていたことなのよ。だから本来なら悪い占いほど、信じたほうがいいの。その災いを避けるためにね」

「ああ、そうだね！ いいことだつたら、先に知らないほうが嬉しいし

「でも、そやつて人の弱みに付け込んで、災いを回避するためにこの壺を買ってください、とかっていう詐欺が横行しているんじやないのかな」

それもあるんだ。人の心は弱くもろい。何を信じるか、疑うか。正常な状態ならば、容易に判断できる」とも、時にほんのりと騙されてしまう。

「ま、あまり深く考えなくてもいいわ。あなたたちのよう適当に付き合えばいいのよ。占いに求めるものが変わつていて、何で

未だに占いが愛されているか。それは自分自身や将来に不安を感じている人が多いくことよ。その不安を拭うために占いは存在しているのよ

「そつかーじゃあ今までどおり、いいことだけ信じていればいいんだね」

何かものすごく遠回りをしたが、結局元の場所に戻ってきたな。不安を拭うために存在している、ねえ。

「ということは、やはり占いはただの気休めなのか？」

穿った見方をすれば、ただの出来レースである。

『私は将来が不安です』

『あなたの将来は希望に満ちています。何も心配いりません』
『やうですか、ありがとうございます』

といふ会話を求めて、占いをしているといふことになる。なんだか、とても無駄なことをしているような気がするのだが。

「ま、言つてしまえばそうね。でも、気休めでも不安やストレスを解消してあげなきゃ、大変なことが起きるかもしれないわ。窮鼠猫を噛む、ってこうでしょ」

追い詰められた人間は何をするか分からぬ、といふことか。確かに、不安で押しつぶされそうな人間に対して、残酷な真実を告げてしまつたら、もう救いはないだろ。本人がそう自覚してしまつたら、正常に生きることは難しい。心が壊れてしまえば、人間はたやすく壊れてしまうのだから。

「さ、難しい話は終わり。そろそろ占いましょうかね。ねえ、戸塚先輩もどうかしら。何なら、あなたも見てやってもいいけど」

何がそんなに楽しいのか。急に上機嫌になつた姫は、戸塚結衣を占いに誘い、あらうことか俺までも誘つた。その後、完全に出来レースと化した占いをやって、適当に笑い合つと、雰囲気の明るい占い館を後にした。

15:00～16:00（後書き）

占いに関する言及は、作者の独断と偏見です。
世間的な意見ではないので、
誤解なさらぬよう、よろしくお願ひいたします。

姫の占いが終わると、その足で我がクラスのプラネタリウムに行つた。プラネタリウムはそこそこ盛況していたのか、割と客が入っていたが、半分くらいは行き場とやる気を失くしたうちのクラスの連中がたむろしているような状態だった。それは客が引いてしまつからやめたほうがいいと思つた。

戸塚姉妹が中へ入つていくるを見送ると、俺は隣の展示のほうへ向かつた。プラネタリウムにはあまり興味がない。やはり星を見るときは実際の夜空がいい。たとえ周りが明るくとも、作り物より本物のほうがいい。簡易なものとはいえ、プラネタリウム作りに参加した俺がそんなことを言つてもいいのか、と思わなくはなかつたけど、別段気にしないことにする。とりあえず、展示会場となつている自分のクラスに向かつた。すると、

「あ、成瀬さん！」

クラスの前の廊下に、なぜだか岩崎がいた。一いつ々奇遇だな。

「どうしたんですか？展示を見に来たわけではないのでしょ？」

「むりん、そんなわけない。しかし、それは俺のほうにも言える。

「あんたこそ、何でここにいるんだ？プラネタリウムは昼一で見に来たんだろ？」

「ええ、真嶋さんと一人で来ました。ですが、それはあくまでお客として来てまでです」

「じゃあ今は客として来たわけではないのか？」

「クラス委員として、ですかね」

苦笑氣味に笑う若崎。相変わらずだな。ただでさえ忙しいだろうに、自分の責任感のせいで余計な仕事を増やしていくようだ。俺も思わず苦笑を返す。

「忙しいんじゃなかつたのか？」

俺は若崎の隣に、並ぶよつこ壁にもたれる。

「え、ええ。まあ忙しいですけど……」

「けど、何だよ」

「ええと、まあこれも予定の一つなんで。それより成瀬さんがここに来るほうが意外です」

そうかね。俺は一応帰属意識を持つてはいるつもりだが。ま、帰属意識でここに来たわけではないのは確かだな。

「戸塚の付き添いでここに来たんだ」

なので、意外と言われるのは道理なのかもしれない。つまり誰かの付き添いじゃないとここには来ない。当たつてはいる。しかし、見事正解をたたき出した若崎は、顔をしかめている。

「戸塚さんとずいぶん仲良しなつたんですね」

おこおこ。なぜそんなに不機嫌そうな声を出しやがる。クラスメートと仲良くなつて、いったい何が問題なのだ？ ま、仲良くなつたわけではないので、それ以前の問題なのだが。

「別に仲良くなつたわけじゃない」

「いろいろあつて、な。と言おつとして、すんでのところで思いとどまつた。こんなことを言つてしまつたら、岩崎は全てを放り出してでも、俺たちに協力するに違ひない。それこそ俺たち以上に全力で。もう手に取るようにはつきりと想像することができる。

今日が平時ならばそれでも構わないだらう。岩崎は人の事情に首を突つ込むのが好きだし、おそらく岩崎が関わつたほうがうまくいく氣がする。しかし、今日は文化祭だ。岩崎はクラス委員であり、それ以上に私事の仕事を抱えている。一いちらの手伝いをすれば、岩崎がこの日のために全力を挙げていた準備が無駄になつてしまつて、一緒に関わつっていた周りの人間に迷惑をかけることになつてしまつ。ここには黙つておくのが無難だらう。

「仲良くもないのに、文化祭と一緒に回つたりしませんよ。別に仲良くなること自体は悪いことではないですけどね。成瀬さんに悪意がなければ」

俺に悪意があると確信している言い方だな。一言言つてやりたいが、この話は深く追求しないほうがいい。話を変えよつ。

「ところで文化祭の七不思議のことは調べていいのか?」「はい?特に積極的に調べてはいませんが……」

きよとんとした表情になる岩崎。俺が「こんな」と言つてやつたと思わなかつたのだろう。それはまさしく、意表を突かれた表情だつた。さらに意表をついてやるとするか。

「俺はあと一つでコンプリートだぞ。一応六つまで知つていい

「は？」

今度は啞然とした。うむ、相手の意表を突くのはなかなか楽しいものだな。若崎のこいつの表情は滅多に拝めるものではない。

「あ、あの成瀬さん。どうしたんですか？成瀬さんが七不思議なんて曖昧なものに興味を持つなんて珍しいですね」

ひとしきり楽しさ、じじじで種明かしをしてやる。

「別に興味を持ったわけでも、積極的に話を集めていたわけでもない。話しかけると、相手が勝手に七不思議の話をし始めるんだ」

セヒでよつやく納得の顔を見せる若崎。

「あー、なるほど。言われてみれば、今日は特に七不思議の話題が多いですね。みなさん、何かにつけて七不思議の話題を持ち出そうとするわけですね」

俺には信じられない話だが。中でも、俺にその話題を振ってくる連中の気がしれないね。俺が七不思議なんてものに興味を持つわないだろ？俺のことを少しでも知っている連中なら絶対に知っているはずだ。しかし、あらうことか、その話題を振ってくる連中は、結構俺のことを知っている連中ばかりなのだ。これは嫌がらせなのだろうか。

「どうです？何かお気に召したものはありましたか？」

「俺が知っているのは、どれもクオリティの低いものばかりだ。気に入るどこのりか、苦言を呈したいものばかりだ。作り話としても質が低すぎると。信じるなんて、言語道断だな」

「『すいぶん』な酷評ですね。作った人に同情してしまいます」

苦笑する若崎。言葉とは裏腹に、『すいぶん』と楽しそうだった。

「あんたはどうだ？ 気に入つたのはあつたのか？」

「私は結構どれも好きです。どれも作った人の思いを感じることができますし、素敵だと思います」

意外にも若崎は、どれも作り話だと理解していたようだった。その上で素敵だと誓つ。

「あの完成度の低さでか？」

俺の酷評に対して、またしても苦笑。

「まあ確かに質は低いですし、雑な感じもしますが、それでも思いは伝わりますよ。『あー、こんなことあつたらいいな』とか『こうだったら素敵だらうな』って気持ちはよく分かります」

俺と向かい合つていた若崎は、ふと体の向きを変え、窓の外を眺めた。

「七不思議つて、とても都合のいい話ばかりですよね

「そのとおりだ。だからとてもじやないが、信じじる気にならないのだ。

「楽しいこと、素敵なことを望むのは、人の真理です。中にはよくないものもありますけど、裏を返せば、そうなりたくない、と望む人が作つた、と言えます。嫌なことが起こりませんように、楽しい

「ことが起りますよ。その願いがそのまま七不思議になつたのです。そつ考えると、」

言つて、岩崎は俺のほうに向き直る。そして、

「みなさん、よほど文化祭を楽しみたいんだな、って思いませんか？だって、文化祭限定の七不思議ですよ？これでもか、つていうくらい素晴らしい楽しみ方だと思いませんか！」

飛び切りの笑顔を見せる岩崎。二つの顔を見て、俺は、

「なるほど」

と思わず、同意してしまつた。なぜなら、田の前に立つ二つが誰より楽しそうで、嬉しそうな顔をしているのだ。その笑顔を見ていると、こいつがなぜいくつも仕事を掛け持ちして、いくつも有志のパフォーマンスをこなしているのか、ということが分かつたような気がした。ただ、楽しみたかったのだ。誰より楽しみたかったのだ。普通の生徒が二つの有志に参加しているとすると、四つも五つも掛け持ちしている岩崎は、普通の倍以上文化祭を楽しんでいることになる。満喫していることになる。むろん単純にそうとは言えない。楽しみ方は人それぞれだ。俺は有志に参加したいと思わないし、仕事は少ないほうがいいと思っている。しかし、岩崎を見ていると、岩崎の楽しみ方が正しくて、俺はかなり損をしているような気がしてきた。もちろんただの気のせいだろう。ただ、一瞬でもそう感じさせた岩崎は、やはりとんでもない奴なのだ。改めて感心した。

「そう考えると、成瀬さんも文化祭を楽しんでいるみたいですね」

「俺が？」

「だつて七不思議調べているんでしょ？」

「調べてない。向こうから勝手にやつて来るんだ」

「向こうから勝手に？「うやましいですね。成瀬さんはまるで文化祭の申し子ですね」

意味不明にもほどがあるな。どうでもいいが、俺は嬉しくないし、楽しんでいるつもりもないぞ。

「といひで、戸塚さんと一人で文化祭を回つているんですか？」

岩崎は急激に話を戻した。どうしてもそこが気にならじい。

「一人じゃないし、悪意もないぞ」

「一人じゃないんですか？ ではどなたと？」

「これは言つても大丈夫だろ？」

「戸塚の妹だ。姉の高校生活を覗きに来たらしい」

「へえ。ずいぶん仲のいい姉妹なんですね」

もう姉妹というか親友という感じだな。お互い名前で呼び合つてゐるし。それでも、結衣のほうは姉という自覚があるらしく、どこかしこで妹をたしなめるような言動をすることがある。彩衣のほうもどことなく甘えている様子がある。親友のような関係だが、それでもやはり姉妹だな。理想的、という言葉が冠につくのは間違いない。

「成瀬さん、無理矢理間に入つて一人の関係を壊してしまつてはダメですよ。文化祭でケンカすると、取り返しがつきませんからね」

「その話は知つている」

七不思議ネタかよ。俺は七不思議など信じていないし、一人の間に無理矢理入るつもりもないし、一人の関係を壊すつもりもない。とか、なぜいきなりこいつに説教をされなければいけないのだろ？ しかも、ありもしないことで。

「あと、文化祭において、恋愛がらみの騒動に足を突っ込まないほうがいいですよ」

そんなものの文化祭じゃなくたって、関わりたくないね。恋愛がらみだつて？ 間違いなくこじれるに決まっているじゃないか。とばつちりを食らうのが目に見えている。

「「」の話は聞いたことがありますか？」

言つて、話し始めたのは、紛れもなく文化祭の七不思議の話だった。

「文化祭で他人の恋愛事情に関わると、その後一生他人の恋愛に振り回される人生を歩むことになるらしいですよ。何でもその昔、友人の恋愛に面白半分に付き合つていたら、その友人から逆恨みを買って、卒業後もいろいろ迷惑をかけられた女子生徒がいたらしいです。その女子生徒は、ことあるごとに恋愛相談を受けては迷惑をこうむり、自分はまともに恋愛をできずに不運で不幸な人生を送ったそうです。死後、彼女はきっとかけとなつた文化祭に出没して、自分と同じ運命をたどる仲間を探しているんだとか

「それは大変な話だが、そんな話をなぜ俺にするんだ？」

俺の意見としては、どちらかといつとその辺があるのは岩崎のほうだと思うね。

「成瀬さんはお人好しのヘタレですから、真剣に頼まれたら断れないでしょ。だからその時の切り札にするといいですよ。断る言い訳にでも使ってください」

そんな紹介いらぬぞ。それにしても、と思ひ。

「文化祭の七不思議は、人間関係、もつと書つと恋愛がらみの話が多いな」

ついにコンプリートしてしまった俺は、全部の話を思い出す。三原、日向、姫、そして岩崎。この四人から聞いた話は全て恋愛がらみで、天野の話はいじめの話。高校生とはいえ、人間関係の難しさはついて回るらしい。

「それだけみんな恋愛に苦労しているということです。特に恋する女子高生はすごいです。恋に命を懸けていると言つても過言ではないでしょ?」

「恋に、命ねえ」

にわかに信じられないが、女子ならあるような気がする。俺たち男子とは思考回路が違う。優先順位など、違つて当たり前なのかもしれない。

「なので、女子の恋愛事情は黒いですよ。女子間の恋愛事情はある程度筒抜けですから、当然ライバルも知っています。思い人が付き合つているなら、別れさせて寝取る、なんて当たり前ですよ」

「聞きたくない話だな」

恋愛は美しいもの。友情は永遠。と、心から信じてゐるわけでは

ないが、じつもあからさまに公言されると、さすがにもの悲しさがある。恋愛に興味のない俺がこつなのだから、女子に夢や希望を抱いている一般男子どもはさぞかし心苦しい話だらう。

「ま、少し大げさに表現しているのは否めませんが、それでもきれいなものばかりでないのは本當です。七不思議を利用して、カップルを別れさせる、なんていう過激派の人たちもいますからね」

過激派、という派閥があるかどうかは置いといて、七不思議を利用して？それはどうこりうことだ？

「先ほども言いましたが、文化祭でケンカをすると……という話があるじゃないですか。あれを利用して、わざとカップルにケンカさせるんです。それも集団で仕組むんです。術中にはまつたカップルはケンカしてしまう。文化祭中にケンカをすると、一度と復縁できない。愚かにも信じてしまった人たちは、自ら可能性を絶つてしまふわけです。策士たちはその哀れな背中を優しくなでながら、こういふわけです。『かわいそに。私だったらこんないい人、絶対に手放さないのにな』」

「そうやってまんまと寝取るわけか」

返事をせずにうなずくと、『ああ無情』とばかりに首を左右に振る。

「はつきり言つて信じがたい話だな。なぜ付き合つていた相手より、七不思議を信じるんだ？」

「人の心はそんなに強くできていないのですよ。人は不安に押しつぶされてしまいます。そんな時にもつとももらしい話をされると、口口と信じてしまうわけです」

岩崎の話は胡散臭かつたし、俺ならばバカバカしいと吐き捨てると思うが、信じてしまうものもいるというのは、事実なのだ。

「成瀬さんも、恋する女子を敵に回さないほうがいいですよ。彼女たちは手段を選びません。下手に首を突っ込むとやけどじやすまい大けがを負いますよ。彼女たちにとつて、他人の不幸など、落ち葉みたいなものです。そこにあつたら掃いて捨てるだけなんですよ」

いつたいて何の話か分からなくなってしまっている。確かに、恋する女子の話だったと思うが、岩崎の口ぶりだと過激派のテロリストのように聞こえてしまつ。岩崎の話をまるつと信じると、恋する女子たちは前科の一つや二つは当たり前、人を殺めていてもおかしくない。ま、俺は全て信じるつもりはないが、多少は信じる。岩崎の話を多少信じると、一つの可能性が見えてくる。信じがたい話ではあるが、筋は通る。

「それで、あんたはビデうなんだ？」

「はい？どう、とはどういう意味なんだ？」

「あんたもよく自分のことを、恋する乙女、と称するだろ。あんたも前科の一つや二つはあるのか？」

「ぜ、前科なんてないですよ！私は他人を陥れてまで、幸せになりたいとは思いません。わ、私の好きな人も、そんなこと許すはずありませんから」

案外まともな答えが返ってきてほつとした。

「そうかい。そりやよかつた」

「それはそうと、成瀬さん」

唐突に話を変える岩崎。その表情は、先ほど以上に真剣だった。

「私に、何か言つことがありませんか」

一体何の話かと思ったが、若崎の口を見て思い当たる。

若崎は何かを待つていた。その口は確信に満ちていた。おそらく、俺が今何か事件に巻き込まれていることを確信している。だが、それを言わずにいる。これが何を意味するか。

「言つこと、ねえ」

若崎は今朝、何かあつたら連絡してくれ、と言つていた。忙しいが、何か手伝えることがあるだろ、と言つていた。俺はそれに、必要があれば、と答えた。

若崎は待つているのだ。俺が手伝ってくれ、助けてくれ、と頼むのを。おそらく、何かあつた、と確信している。しかし、それを俺に言わなのは、俺の口から言つのを待つている。ならば、俺の言うべき言葉は決まっているだろ。

「ああ。何もないな。今日一田で特筆すべきことは何もない。麻生が財布を盗まれたぐらいだ」

「そう、ですか。麻生さんのおサイフは見つかったんですか?」

「ああ。すぐに見つかった。犯人も特定できている。捕まるのも時間の問題だ」

「そうですか。それはよかったです」

全然よくなさそうな顔で言つた。全く世話の焼けるやつだ。別にあんたを必要としていないわけじゃないぞ。あんたの手を煩わせるほどのことでもないんだ。あんたはあんたの文化祭を楽しめばいい。

それだけなのだが、どうせ言つても聞きやしないだろう。仕方ない。結局俺が気を遣わなければいけないんだ。こつなることは分かつていたよ。

「そういえば、クラスの打ち上げは明日になつたんだつてな」

「え？ ええ、みなさん疲れていると思いますし、どうせ明日も部活動はありませんので。それがどうかしましたか？」

「じゃあ今日の放課後は空いているわけだな」

「はい。ですから、それがどうか？」

「今日はうちに来い」

「え？」

「今日は一ひとの打ち上げをしよう」

「ううして、俺は身体を張るわけだ。なぜ俺がここまで身体を張らねばならないのだろうか。今回の文化祭で俺は人一倍頑張ったはずだ。今日だって他人のために奔走している。しかし、それでも他人はまだ俺を認めてくれないらしい。どう考へてもひどい話なのだが、偶然だらう。そう思わなければ、やつていけない。

「あんたは全員に連絡してくれ。誰を招集するは任せぬ」

「は、はい。あの、でもいいんですか？」

俺が言つ出したのだ。いいに決まつてこる。

「覚悟はできているよ」

あんたがそんな顔じゃ、周りが心配するだらう。どうせ俺のせいにされるんだ。だから、これでいいんだ。おそらくな。

「分かりました。ありがとうございます。それと、すみません」

謝るくらいなら、もつしないでもらいたいね。

「あ、あの、成瀬君……」

俺と岩崎の間に微妙な空気が流れ始めたころ、よつやくプラネタリウムから戸塚姉妹が出てきた。

「お待たせしました」

そんなに待つていいぞ。そんな恐縮されると俺が困るし、他人からの視線が痛いから勘弁してくれ。

「戸塚さん、プラネタリウムはいかがでしたか？」

岩崎が戸塚結衣に話しかける。すると、

「ま、作り物、って感じだったね。文化祭にしては結構まともだつたけど」

答えたのは彩衣のほうだった。どちらも戸塚さん、だからどちらが答えるもいいのだが、姉妹本当に似てないな。彩衣は前に出るタイプで、結衣は後ろに控えるタイプだ。どちらがいいとは言わないが、両極端と言えよう。

「そうですか。一応誉めてくださつていいのですよね？」

「彩衣ちゃん、ダメだよ！」

苦笑する岩崎。戒める戸塚結衣。そんな二人をお構いなしに、彩衣は、

「ねえ、あなた誰？成瀬君の彼女？」
「わ、私ですか？彼女？」

おかしなくらい取り乱した若崎を無視して、

「彼女じゃないぞ。ただの腐れ縁だ」

「く、腐れ縁とはなんですか！そもそも使い方が間違っています。腐れ縁とは、嫌々ながら続いてしまうような関係のことを意味する言葉です。たかだか一年同じクラスになつただけで使うような言葉ではありますん！」

確かに使い方が間違つていたような気もするが、そこまで否定するところには、しつづくる別の言葉があるのか？

「腐れ縁でなければ、何だ？」

「な、何だ、と言われましても……。私には決断しないと申しますか……」

何なんだ、いつたい。俺はローリーも若崎を見て、頭に疑問符を浮かべるだけだったが、

「なるほど、そういう関係かあー！」

一人得心の彩衣。俺と若崎を交互に見ると、最後に姉を見て、

「いいね。結衣ちゃんの学校は楽しそうで！」

言われても、ピンとこない。何を見て、そう感じたのだろうか。この漫才みたいなやり取りでそう思つたなら、勘違いも甚だしいね。

「さて、そろそろ俺たちは行くぞ」

適当でぐだらないう話がひとしきり盛り上がり上がったところで、俺は若崎に向って終了宣言をする。あまりこじつけてもじょうがないし、プラネタリウムと展示に迷惑がかかる。

「そうですか。私もそろそろ次の仕事に向おうと思っています

「そうか。適当に頑張れよ」

「はい。成瀬さんも、頑張つてください」

俺が何を頑張るって？ 事件はもう解決していると語り切るだろうが。

「戸塚さんも楽しんできたださい。文化祭は今日で終わりですかうね。田口さんはい楽しむといいですよー。彩衣ちゃんもね」

「はい。若崎さんもお仕事頑張つてね

「ありがとうございます。若崎さん

「うひして、俺たちは若崎と別れた。

「あの、成瀬君。次はどこで？」

しばらぐ廊下を歩いていると、戸塚結衣が訪ねてきた。そういうえば、まだ言つていなかつたな。

「とりあえず麻生と連絡とつて合流する

「それから？」

「それから、」

発端が七不思議で、主人公が演劇部つていうのが、また面白いな。
俺から見たら茶番でしかないんだが、それでも舞台は舞台だな。

「」の陰謀劇を終わらせて、フィナーレを迎える

麻生に連絡をすると、ちょうど最後のパフォーマンスが終わったところへ、中庭に集合することになった。

「それで、捜査のほうはどうだった？何か分かったのか？」

まあある程度、俺は全貌がつかめている。相変わらず証拠はないが、実際手に入らないだろう。目撃者でもいれば話は別だが、出でこないと考えるほうが現実的だ。それでも解決には問題ないし。とはいっても少し確信できる材料がほしい。

「お前のほうはどうだ？独自に調査していたんだろう？」

あまり期待していないが、演劇部の人間なら、多少は情報を持つているかもしない。

「俺のほうはとんでもない情報を手に入れているぞ

「え？ 本当？」

「すごいじゃん、麻生！」

麻生の発言に、それぞれリアクションを見せる戸塚姉妹。しかし、彩衣は麻生を呼び捨てなのか。俺は確かに君付けだったな。俺のほうがやや格上ということか。いや、単に姉の呼び方を真似しているだけだろう。

「で、その情報って？」

「それは、演劇部一年の中でも、俺が大人気ということだ」

「はあ？」

「はあ……」

麻生の発言に、それぞれリアクションを見せる戸塚姉妹。

「いやな、俺もびっくりなんだが、どうやら演劇部一年は俺の噂で持ち切りらしいんだ。いつのころから一年たちが俺の名前を出し、どんな人か知りたがり始めたらしく、俺の友人も何度も質問されたらしい」

「何その情報！ 今回のことと全く関係ないじゃん！」

「いや、待てよ。これは俺のファンが、俺の私物欲しきに起因した犯行ってことで間違いないだろ？」

「ないよ！ あんたはどこのアイドルなのよ！ 一年下が噂しているからつて、浮かれすぎ！」

「浮かれているわけじゃなく、冷静に考えてそれしかないだろ？！」

とりあえず落ち着け、一人とも。冷静なら、もう少ししゃんと説明してくれ、麻生。そんなに頭になしに否定しなくてもいいじゃないか、彩衣。お前は関係ないんだから、おうおうするな、結衣。

「麻生、噂に心当たりはないんだな？」

「ないな。演劇部一年とはほとんど関わりがない」

「ほとんど、といつと多少はかかわりのあるやつがいるってことか？」

「ああ。お前覚えていないか？ 一年女子で、磯崎里美ってやつがいるんだけど」

一応形だけでも考えてみる。しかし、心当たりなどあるはずもない。

「誰だ？」

「俺たちと同じ中学出身で、中学時代に多少接点があったんだ」

俺は知らないな。お前が年下の女子とよろしくやっていたとは。
「この行動を逐一把握するよつた趣味はないので、当然と言えば
当然だ。

「接点つていつのは？」

「委員会だな。三年のとき、無理矢理クラス委員をやらされたんだ
が、そのとき磯崎と知り合つたんだ。でも委員会の時しか話してい
ないし、高校に入ってからは全く交流はない。知り合つていつより
は、ただの顔見知りだな」

なるほど。このことは本当に対人関係に強いな。委員会で一緒にな
つたからと書いて、すぐさま知り合いになどなれるものか。別段年
下女子と知り合いになりたいわけではないが、すぐさま他人と打ち
解けられることは素直につらやましいと思つ。

「それで、噂はどんなものだ？ もう少し詳しく教えてくれ」

俺が言つと、

「ちよつと、成瀬君」

彩衣が間に入つてくる。

「この話、サイフー重窃盗事件に関係あるわけ？ 麻生の妄想じやな
いの」

「何で俺がそんな悲しい妄想を語らなきやいけねーんだよ」

その可能性は否定できないが、おそらく

「事件に直結していると思う。麻生のサイフが盗まれた。そのサイフが演劇部の行う舞台の舞台で発見された。その演劇部の一年の中での、麻生の噂が飛び交っている。正直、偶然が重なりすぎている。偶然が重なりすぎると、それは、」

「誰かの意図が介在している可能性が高い、てこと?」「その通りだ」

俺はほぼ確信しているのだが、いまいち信じがたい事実なので、慎重に事を進めようといつして麻生から情報を得ているのだ。それで、麻生。教えてくれ。

「麻生に対する噂があつたのは分かった。今日に限って言ふばどうだ?何か聞いたか?」

「ああ。今日は演劇部の一年女子がこそそ何かしていた、と言つていたな。今日は一年だけの舞台があるから、緊張しているんだろう、つてそのままそつとしておいたらしい」

「じゃあ今日の『』の舞台は、一年だけでやつていたのか?」

「そうらしい」

では彩衣が拾つたのは、間違いなく一年の落とし物だろう。さて、そろそろいいか。ほしい情報は見事にそろつた。物的証拠でもあれば嬉しいが、そんなもの一高校生である俺たちが探せるはずがないし、見つけたとしても使えないだろう。では、

「決まりだな。演劇部の一年女子を呼び出せ」「待つてくれ、成瀬」

「この期に及んで何だ。というか、なんだその顔は。

「待つてほしい。もう少し考える時間をくれ

考える時間？意味が分からぬ。お前が何を考えるというんだ。そして、その身を裂かれるような苦しい表情はなんだ。

「どういう意味だ？」

「だって、彼女たちは俺の私物がほしかったのだろう。使用するためではなく、コレクションとして」

「はあ？」

「おそらく彼女たちにとつて、俺は神にも似た遠い存在。そんな俺に、直接声をかけることなどできない。しかし、俺に近づきたい。そう考えると、俺の私物、それも身体の一部とも呼べるほどの大切なモノがほしかったのだろう。そんな彼女たちの心情を思つと……」

身を裂かれるような悲痛な表情は、そのまま悲痛な言葉となつて表れた。それは麻生を思つ彼女たちの叫びのはず。しかし今は、麻生の叫びそのものになつてゐる。麻生、お前そこまで……。

「麻生君……」

思ひが言葉となり、言葉が思ひとなる。そして、思ひは伝播する。彼女たちの思ひが麻生に届き、麻生の叫びが戸塚結衣に届く。戸塚はちらりと俺のほうを見た。そして、唇をかみしめると、瞳に涙を浮かべる。おそらく、その悲痛な思ひに心当たりがあるのでだろう。妹の話では、結衣にも思い人がいるらしい。思い人のことを思つ。その気持ちが痛いほど分かるのだろう。

「…………」

戸塚妹、彩衣も先ほどとは打つて変わって、黙り込んでゐる。姉

とは違つて、この思いが分かるわけではないようだが、この空気には飲まれてしまつていいようだ。戸惑い。その感情がありありと表情に浮かんでいる。どうしていいのか、何を考えればいいのか。麻生に向けて、どんな言葉をかけばいいのか。悩んでいるようであり、気づいているようでもある。

そして俺は……。

「妄想もいい加減にしろ」

「は？」

「ええ？ もうつそう？」

何を考えているんだか。演劇部の一年女子が全員麻生に恋をするわけないだろ？ ファンになるなんて言語道断だ。私物？ コレクション？ これほど頭のおかしい奴だとは思わなかつた。妄想というか、むしろ病気に近いな。

「え？ 成瀬君、どうこいつ」と？

「どういつもとも何も、全部麻生の『冗談だろ。でなきや茶番だ、笑劇だ、小芝居だ』

「ええつ！」

育ちがいいのか、それとも人を信じやすいのか。戸塚結衣は本当に騙されていたようだ。

「何だ、やつぱり『冗談だろ』なんか麻生もやけに真剣だし、成瀬君も突つ込まないし。この空気感がよく分からなかつたんだよね。でも、『冗談でよかつた』

「戸塚妹は気づいていたのかよ。最後まで演じちゃつた俺がバカみたいじやないか。でも、戸塚姉は信じてくれていたみたいだし、ま

あいいか

くだらないことに時間を費やしてしまつたら。文化祭はもう終わりだ。一般客は十七時半には学校から出ていかなければならぬし、時間がないのだ。無駄な時間を取りはせぬな。

「それで、成瀬。犯人は誰なんだ？どんな目的のためにこんなことをしたんだ」

「動機も犯人もだいたい日星はついているが、証拠はないし、自信もあまりない。行つて、犯人に自首してもらおう。話はその時に聞けばいい」

「自首？そんなことできるのか？証拠もないのに？」

「ああ」

俺はこともなげに言つてやつた。おそれく血ひり血乗り出でるを得ないだろ？ そういう状況を作ることが可能だ。

「とりあえず、演劇部の一年女子を全員集めてくれ。場所は、そうだな、連中の活動場所でいいだろ？」

「分かつた。演劇部の連中には適当な理由をつけて、お願ひしてみるよ」

サイフの話をすれば、連中は集まってくれるはず。少なくとも、犯人は来るだろ？ な。

キーワードは、恋する乙女と文化祭の七不思議だ。

「いい加減、教えてくれてもいいだろ。俺は被害者だぞ」

演劇部一年女子を集めることに成功した俺たちは、演劇部の活動拠点である体育館に向かっていた。とはいって、体育館でそんな怪しげな集まりをすることはできないし、すでに片付けが始まっているかもしれない。正確な場所は、演劇部の部室。それも着替える場所ではなく、演目や配役に関する話し合いを行う、いわば会議室のようなどころだ。

「犯人については心当たりがあるだろ。勘でも何でもいい。話の流れから、おそらくこいつだろ、という人物がいるだろ。」

「といふと、磯崎里美か？」

「『』明察」

「本当かよ」

信じられないのも無理はない。ほとんど関わりがないやつだというのは、本当なのだろう。そんなやつの窃盗のターゲットになってしまったのだからな。それでも磯崎里美が一番疑わしいという事実は変わらない。

「磯崎が俺のサイフを盗んだのか？ 何の目的で？」

「…………」

それがあまり言いたくないのだが……。言わざるを得ないだろ。俺とて、本当にこんなことがあるのかと、疑っているのだ。

「何だよ、そんなに言い難いことなのか？」

麻生の表情が変わる。俺が躊躇つたことで、ただ事ではない、と考えたらしい。ただ事でないのは間違いない。しかし、真面目な意味ではない。要するにふざけた事態であるといふことだ。

なぜだか麻生は緊張し、その空氣につられたのか、戸塚姉妹もやや張りつめた空氣を発している。俺も緊張してしまった。この空氣の中で、くだらない発言をするのは勇気がいる。俺だって言いたくはない。言いたくないから、濁すことにしてよい。

「ぶつちやけてしまつと、麻生の語つた妄想話と似たようなものだ」「は?」「えつー!」「はあ?」

三人ともとりあえず驚愕のリアクションをくれた。驚いてくれて、嬉しい。だから言いたくなかったのだ。

「ちよつと成瀬君ーどうこいつこと?」

なんでお前がそんなに食いついてくるのか、俺には分からない。

「俺の妄想話、つてわざき言つた俺のファンがどうのいつてやつだよな?それと似たような話だと?さつぱり理解出来ん」

信じられないのも、理解できないのも同感だ。俺とてそうだ。だからこれ以上は本人に聞いてみようじゃないか。これから本人に会いに行くのだ、俺から中途半端な話を聞くより、そっちのほうが簡単だし、説得力もあるだろう。

「もう答えは目の前だ。俺だって信じていないし、証拠もない。だったら本人に直接聞いてみよう。それが一番簡単だ」

とりあえず早いところ案内してくれ。俺はその演劇部の活動拠点とやらを存じていないので。そこに行けば、全てが分かる。俺が解決してやると断言してやる。というか、もうこんな茶番に付き合いたくない。何が七不思議だ、恋する乙女だ。

それからあまり無駄口を叩かずに黙々と歩き、ついにたどり着く。そこは文化祭中とは思えないほど人気のない場所で、怪しい会談をするにはふさわしい場所だった。

麻生が扉を叩く。すると、中から女子生徒が顔を出す。

「あー、あのさつき連絡した者なんだけど、」

言つと、対応した女子生徒はやや緊張した面持ちで、

「どういだ」

と言つて、中に通してくれた。目的不明の来訪者を招き入れた、といつより、警察を招き入れた犯人の知人、という感じだった。

女子生徒に続いて中に入ると、演劇部一年女子が全員立つたまま待ち構えていた。全員戦闘態勢、といった感じだった。

「いったい何の用です？まだ文化祭は終わっていないというのに

いきなりケンカ腰だった。麻生は俺を見、目で訴えてくる。俺に説明しろ、ということだろう。

「ここにいる麻生が、財布を盗まれてな」

「それは御愁傷様です。それが何か?」

応対する女子生徒の声は、ことじとく冷めている。それは何かを拒むよつて。私たちは関係ないと叫ぶよつて。

「それが、体育館の舞台で見つかったんだ。あんただちが舞台とやつていた時に、だ」

「えつ?」

その驚きは何を指しているのか。解答を導き出すために、さらに入り込む必要がある。正直言つて、やむことは変わらない。俺の考えが当たつていたところで誰も不幸にならないし、外れたところで俺は何も失わない。代価も支払わない。何も変わらない。なので、躊躇なく踏み込んでやる。

「結論から言つと、俺はこの中に麻生のサイフを盗んだ犯人がいると考えている」

「…………」

空気が変わつた。だが、ざわついたりしない。今度の俺の発言には驚きはないようだ。おそれく覚悟はできていたのだらう。この空気の変化は、俺に対する敵対心のスイッチが入つたところじだらう。

う。

「素直に名乗り出してくれれば、悪じよつにはしない。面倒は嫌いなんだ。ここで名乗り出でくれないか」

ま、素直に名乗り出でてくれなくても、悪じよつにはしないが。

「もうサイフは返つてきている。麻生も特に恨んではない。すでに事件は解決していると言つてもいい。もう罪は追及しないと約束する。頼む、名乗り出してくれ」

「何を根拠に私たちの中に犯人がいると言つてているんですか？私は知りません。それに、事件が解決しているというなら、なぜこんなところに来て探偵の真似事なんてやつているんですか？面倒事が嫌いなら、こんなこと止めればいいのに」

「俺だつてやりたくてやつてているわけじゃないんだが。俺が苦労しているのに、誰も労つてくれない。悲しくなつてくるな。

「なぜあんたが、誰も知らない、と断言できる。もしかしたら、この中の一人くらい何か知つてている奴がいるかもしれないだろ？」「そ、それは……」

別に揚げ足を取りたいわけでも、追い詰めたいわけでもない。ただ、名乗り出してくれれば、少しだけ手助けをして、あとは好きにすればいい。

「どうしても名乗り出してくれないのか」

「え、ええ。だつて本当に私たちは……」

まあ、いい。おそらくここにいる全員はグルだろう。事情は知つているはず。ならば、ここで謎解きを開始しても構わないだろう。ま、向こうが何も言つてくれないので。俺としてはこうするしかない。

俺はサイフを取り出す。

「悪いが強硬手段を取らせてもらひ。悪く思つなよ」

取り出したサイフを隣にいた戸塚結衣、は止めて、戸塚彩衣に渡す。

「ん? 何これ」

「麻生に渡してくれ」

「何であたしが?」

「よろしく頼む。あんたから渡すのが一番なんだよ」

「よく分からぬけれど……」

意味は分からずとも、事の必要性は分かつてくれたようだ、彩衣は麻生に向かって一步踏み出すと、

「はい、これ」

サイフを差し出した。

「お、お! サンキュー」

事情を把握しきれていない麻生も、納得できないながらも礼を言つてサイフを受け取つとした。そして、

「止めて!」

女子十余人のゴーリングが部屋の中に鳴り響く。強い拒絶。その声の大きさ、迫力に麻生も彩衣も思わず固まつてしまつ。何が起つたのか、分からぬのだろう。驚きは、一瞬の空白を生む。

「！」苦笑さん

俺は再び麻生と彩衣が動き出す前に、サイフを横からかっせりつた。これで、全てが明らかになった。

「言つておぐが、俺だつてこんな強硬手段は取りたくなかつたんだ。素直に言つてくれればよかつたのに」

「…………」

「何? どうこいつこと?」

サイフを持つていたその形で固まつて居る彩衣は改めて疑問を呈した。

「ここで言つてもいいのか?」

俺が連中に問い合わせると、自然と一人の女子に視線が集まる。そいつは紛れもなく磯崎里美だつた。これでやつが首謀者であることが明確になつたな。

「…………」

しばらく放心したように固まつていた磯崎里美だが、決意を固めたように顔を上げると、麻生の顔をじつと見た。そして、

「みんなに迷惑をかけたのは事実ですから、ここで構いません」

一気に立ち直つたようだ。強いね。

「だから、どういづ」と、磯崎が俺の財布を盗つたつこと?「

「誰が盗つたかは知らないが、この中の誰かがやつたことは間違いないだろ?」

「え？ 首謀者はあの子なんじゃないの？」

首謀者は磯崎里美で間違いない。しかし、実行犯が彼女とは限らない。見れば分かるだろうが、ここにいる連中は全員事情を知っている。なぜ磯崎里美がこんなことをやったのか。理由を知って、協力しているのだ。

「事情を説明してやつてくれ。俺も細部まで分かつてはいなんだ」

俺が磯崎里美に言つと、

「はい」

力強くうなずいた。さて、これで俺の役目も終わりだらう。と思つたのだが、

「麻生先輩！ ずっと好きでした！ 私と付き合つてください！」

「は？」

「ええっ！」

「はあ……」

最後のため息じみた発言は俺の物だ。これでは何も分からぬだろ。一から説明してやれよ。

「い、いや……」

「だ、ダメでしょ？ うか……？」

「いや、ダメとかそういうんじやなくて……。おい、成瀬！ 」

わめくな。なぜ俺にどなる。説明不十分なのは磯崎で間違いないだろ。俺は何も悪くないぞ。

「な、成瀬。説明してくれ。こいつヤジリハシだ、何かのドッキリか?」

「落ち着け。お前なんかドッキリ企画で嵌めても何も面白くない。それに、そんな企画に俺が付き合つわけないだろ?」

「そ、そつか。じゃあどういうことだ?」

「ここのに来る前、話だらつ。お前の妄想じみた話とあまり変わらないこと」

混乱して、すっかり忘れてしまったのだろうか。俺は話したくなかった。しかし、磯崎里美が熱に浮かれてしまっているので、こうなつたら俺が説明するしかない。もう破れかぶれだ。どうでもなれ!

「磯崎里美はお前に恋心を抱いている。それがこの事件の発端だ」「いや、待て。どこの世界に好きな人のサイフを盗む手癖の悪い女子高生がいる?話が最初から見えてこないぞ」

徐々にヒートアップしてくる麻生。何度も言つが、落ち着け。

「わめくな。話を最後まで聞け」

このつまらない話を俺がしなければいけないこの状況を恨みながら、俺は事件の全貌を話し始めた。

「お前と磯崎は中学で出会つてそこそこ仲良くなつたが、高校ではほとんど接点がない。そう言つたのは、お前だな」

「ああ。事実だ。高校に入つてからは会話をした覚えがない」

すでに恋心を抱いていた磯崎は、近づきたいのに近づけないこの

状況に焦りを感じていた。話したい。でもきっかけがない。きっかけや機会がないと話しかけることができない。話しかけなければ、この恋は始まる前に終わってしまう。高校に入学してからもう半年経過した。しかし、未だ一言も話せていない。焦っていた磯崎の耳に、魔法の言葉が届く。

「それが、『文化祭の七不思議』だ」

文化祭の七不思議の中には、恋愛に関するものが数多く存在する。この中のどれかを実行すれば、麻生と親密になれる。あわよくば恋仲になることができる。そう考えた磯崎は、おそらく必死に調べただろう。自分が実施可能で、望みをかなえることができるであろう、この都市伝説を。

「しかし、自分の望みと現実に実行できる内容がかみ合わなかつた」そこで思い付いたのが、七不思議の曲解。『じじつけとも呼べる、今回の犯罪行為じみた恋を成就させるための作戦だ。

「麻生、こんな話を知っているか？」

「あ？ 何だ？」

「文化祭の最中に大事な物を失くした人に、その失くした物を届けてあげると、とても親密になれる」

「いや……。で、それがどうかしたのか？」

「今回の事件で、戸塚妹がサイフを拾わなかつたら、どういう結末を迎えていたと思う？」

「何が言いたいのか、分からねえよ。はつきり言つてくれ

」「いつも自分で考へるということしないのか。少しは頭を使ってもらいたいね。これ以上俺の手を煩わせないでくれ。」

「戸塚妹が持つていなかつたら、お前のサイフは、誰が持つている？」

「きっと磯崎さんだね」

答えたのは麻生ではなく、彩衣だった。

「その通り。で、麻生は大切なサイフを失くしていた。で、そのサイフを届けたのが、磯崎。すると一人はどうなるんだ？」

「親密になれるんだね！」

つまり、この七不思議が成り立つ状況を無理矢理作り出し、七不思議が成立するよう仕組んだわけだ。盗んだサイフでは効力はないかもしれない。そうなると意味がないので、誰かに協力を要請したかもしれない。恋する気持ちが分かつているなら、おそらく躊躇いなく協力してくれたに違いない。だからここにいる全員が、この事件のことを知つていいのだと思う。そして、戸塚妹が麻生にサイフを手渡そうとしたとき、全員が『止めて』と叫んだのも、そういう理由だろう。姫曰く、拾つた人ではなく、届けた人と親密になつてしまつらしいからな。

「それで、あつているよな？」

「うん」

同意を求めた相手、磯崎里美は麻生を見つめたまま頷く。

「他に聞きたいことは？」

麻生に聞くと、

「ねえよ

「おうらも俺のまつは見ずに返事を返す。

「これでようやく本当に役御免だ。俺は教室に戻らせてもらひませ。

「あとは好きにすればいい。俺は帰る。行くぞ、戸塚」

「あ、はい！」

「戸塚妹は帰れ。そろそろ門が閉まる時間だ」

「うーん、もう少し見ていたかったけど、こればかりは仕方ないね

俺は戸塚姉妹を引き連れて、演劇部の部室を後にして。これで何が変わるのか。そんなことは分からぬが、俺の中でこの事件は終焉を迎えた。これは間違いない。

さて。次はフィナーレを迎えたこの物語は、ハッピーエンドなのか、それとも……。どちらだとしても、俺のような端役には関係ないね。願わくば、主役の二人に優しい物語であつてもらいたい。でなければ、俺の奮闘がむなしいものになつてしまふからな。

「あの、成瀬君」

「何だ？」

彩衣と別れて教室に向かうまでの道中、戸塚が躊躇いがちに声をかけてきた。

「さつきの話だけど、」

「何だ？俺はもう忘れてしまいたいのだが。

「あのとき、麻生君のおサイフ、私に渡そうとして、途中で彩衣ちゃんに変えたよね」

よく分かつたな。

「あれ、何で？」

「万が一、連中が止める前に麻生が受け取ってしまうことを考えてな」

あれはタイミングの問題だ。麻生が勢いよく、サイフを取つてしまつたら止める間もない。

「それって、私と麻生君が親密になると困るってこと? あ、麻生君が私のこと嫌いとか?」

自虐的なことを言つた。あんたは嫌われるような人間じゃないし、麻生と仲良くなしてもらいたいとかもいたくないとか、どっちもいい。それに関しては、一人で話し合つてくれ。

「どちらでもない。あんた、好きな人いるんだ？」

「ええつー何で?」

何で、と言われてもな。彩衣との会話とか、要所要所で垣間見ることができた。で、それは麻生ではない、といつことも分かつた。

「あんたはあの七不思議を知つていたし、麻生と親密になつてしまつと分かつたら、嫌な思いをするんじやないかな、と思つてな。戸塚妹に好きな人がいるか分からなが、あいつはうちの生徒じやないし。七不思議も効力外だろ?」

何度も言つが、俺は七不思議を信じていない。なので、誰が渡そうとも、別にそれだけで親密になるとか、まるで信じていない。だが、信じている奴もいる。戸塚は信じてしまいそうだと思った。その点彩衣は、おそらく都合の悪い七不思議は信じないだろう。占いの時にそんなことを言つていたし、こんなことでグダグダ悩むような性格ではない。

ちなみにうちの生徒じゃないから効力外、という制限はない。といふか知らない。あれば俺のオリジナルだ。悪い言い方をしてしまえば、嘘ということになる。だが、これを言わないと、彩衣を蔑ろにした、ということになつてしまつ。そうなると、戸塚はいい思いをしないだろう。結局麻生の手に渡る前に制止したわけだし、渡つていたとしても、それだけで親密になれるわけもない。だからこの嘘は、誰にも優しい嘘なのだ。さて、自分に対する言い訳はこのくらいで十分だろ？。

しばらく黙り込んでいた戸塚だが、突然顔を上げ、

「磯崎さん、すごいですよね」

「ああ」

『すいじ』の意味にもよるが、すごいことは間違いない。皆騎の言つ、『恋する乙女』のパワーは計り知れないな。いい意味でも、悪い意味でも。

「私も、頑張らないと」

俺に言つたのか、それとも独り言つたのか。どちらにしても戸塚の覚悟めいた感情を感じ取ることができた。何をどう頑張るのか

知らないが、犯罪は止めてくれよ。まあ、俺に火の粉が飛んでこなければ、それはそれで構わないのだが。

17・30～18・30（前書き）

これで最終話です。

今回はあとがきまで読んでください。
よろしくお願ひいたします。

教室に戻ると、クラスメートが片づけを始めていた。明日月曜日は終日、片づけの時間に充てられている。しかし、貴重品や生もの、壊れやすいもの、いたずらされそうなものは今日中にある程度片付けてしまうことになっている。完全に遅れてしまった俺と戸塚だが、特別文句も言われず、そのまま片付けに合流した。

片づけはそんなに真剣なものではなく、適当に私語を盛り上げながらやっていた。俺も、その一人である。

「こんな時間まで戸塚さんと一緒に何をしていたんですか？」

「ただの野暮用だ」

「男女一人の野暮用なんて、ずいぶん青春らしい野暮用ですね。うらやましいです」

嫌味が口から止まらないこの女は、紹介するまでもないだろう。当然、岩崎である。

「うらやましいのも青春らしいのも、別にいる。俺と戸塚はただのオーディエンスだ」

「どうせ観客参加型だつたのでしよう」

どうしたらここまで嫌味が言えるのだろうか。ある意味才能を感じさせるが、俺としてはこの才能を別のところで發揮してもらいたいね。さらに嘆くべきところは、この女が嫌味の天才であることを知っている人間があまりに少ないということだ。なぜ俺にだけ、こうも嫌味を言つのか。

「そういうあなたはどうなんだ？青春らしい何かはあったのか？」
「え？私ですか？あつたと言えばありましたが、考えてみればいつもどおりでしたね」

それはいつも青春じみた何かがあるところとか。「うらやましいね。しかし、

「あんたって好きな人がいるような発言をする割に、俺以外の男子と二人でいることあまりないよな。努力しているのか？」

言つと、岩崎の動きが止まつた。これは、嫌な予感がするな……。

「努力しているのか、と言いましたか……」

ああ、しまつた。変なスイッチを押してしまつたようだ。

「努力してますよーしているに決まつていてるじゃないですか！成瀬さんは私が努力しない人間だと思つていてましたですか？」

「いや、あんたは努力家だ」

「ええ、そうです。私は凡人なので、努力しないと成瀬さんみたいになれませんよ！」

「分かつたから、落ち着いてくれ」

「俺以外の男子と、ですって？そこまで気づいていて、何で私の気持ちに気づいてくださらないんですか？」

何かもうよく分からなくなつてしまつたな。俺についての愚痴なのか。その思い人についての愚痴なのか。まあ最近いろいろあつたからな。岩崎もストレスがたまつてているのだろう。俺もストレスがかなり溜まつてているのだが、地雷を踏んでしまつたのは間違いない。ここは俺が大人の対応をするしかない。俺はいつになつたらわがま

まに行動していいのだろうか。俺は誰に愚痴ればいいんだ？

「あの、成瀬君」

呼ばれて振り返る。そいつは戸塚だった。俺は、天の助け、とばかりに手を止めると、戸塚の下に向かった。

「何だ？」

「麻生君が呼んでます」

ああ、そういうとか。もう俺は興味ないんだが、一応報告に来ててくれたといふとか。変なところで律儀なやつだな。

俺は麻生のほうへ足を向けた。そこで気づく。

「戸塚、あなたは来ないのか？」

「え？ 私もいいの？」

おそらくさつきの話だろうから、一応あなたも関係者だ。俺以上に結末を気にしていたからな。麻生だって、怒りはしないだろう。

「興味があるなら来いよ」

「う、うん」

後ろで若崎が何か呪詛的な言葉を吐いているような気がした。

「いやー、やつさは迷惑かけたな」

せつめなどこつか、今日は一皿中お前の両親に追われていたんだが。

「それで、磯崎とのことだけださび、」

その話も、もつ俺の中では終わっているんだけどな。話したいといつなら聞いてやつてもこいが。戸塚はもちろんそのつもつだらうし。

「こきなり付き合つのは、俺には無理だから、もう少しお互に知りあつて、それから判断しようとした。俗に云つて友達から、『つてやつだ』

「いこんじやないか

お互いの妥協点を考えると、それが妥当だらう。もし、結局麻生が断るよつことになれば、磯崎のまつは氣を持たされただけ、といつことになつてしまつが、それはお互い様だし、そんなことを考えていたら、まともに恋愛なんてできないだらう。

「戸塚さんも」めぐね。今日まじめくろ迷惑かけた

「つうん。私のことは気にしないで。どうせやることもなかつたし、暇だつたから」

「そつか。実のところ、戸塚さんに対してはあまつ悪こと思つてないんだ。むしろ感謝してもらいたいくらいだね

何て無礼なことを言つんだ。確かに戸塚は何もしていないが、お前のせいで今日一皿振り回されたんだぞ。そもそもこの件に關して、麻生が感謝されることなんて何一つないはずだ。

しかし、じつはたのは俺だけだったようだ。

「う、うん。ありがとう」

一度驚いた顔をした戸塚だが、その後頬を赤らめて俯くと、麻生に礼を言った。意味が分からんにもほどがある。といふか、もう今日は頭を使いたくない。これ以上意味不明なやり取りは止めてもらいたい。

「報告は以上か？」

「ああ。片づけの最中に悪かったな。一応伝えておこうと思つて」「気にするな。あとはお前の勝手だから、好きにやつしてくれ」

「ああ。今日はありがとうございました」

手を振ると、さわやかな感じで自分のクラスに戻つていった。あいつは本当に高校生活を満喫しているな。うらやましい反面、大変だな、と思つ。

放課後、俺は校門の前で待ちぼうけを食つっていた。なぜそんなところで待たなければいけなかつたのか。それは岩崎たちと連れ立つて、ここまでやつてきたのだが、

「あ、視聴覚室の力ギを返し忘れていました。みなさん、申し訳ありませんが、ここで少しだけ待つてくれませんか？」

「あー、あたしもプラネタリウムの機材忘れた。あれ、一応結構な値段するし、なくしたり壊されたりすると学校に迷惑だから今日持つて帰らないと」

「俺も手伝おうか？」

「あ、うん。よろしく」

というわけで俺は校門にいる。岩崎、真嶋、麻生が回れ右して校舎に戻っていた。しかし、ここで待ちぼうけしているのは俺一人ではない。

「あんたたちはもう帰つてもいいんだぞ」

「あ、でも一緒にここまで出てきたし、岩崎さんに一言頼みかけないと」

「じこまでもまじめなやつだな。一人目、戸塚結衣。戸塚の言つとおり、教室からじこまで一緒にやつてきた。

「あたしは結衣ちゃんと一緒に帰る」

なぜまだいるんだ。一人目、戸塚彩衣。どうやら姉を待つていたらしい。近くのコンビニで立ち読みをしていたとか。コンビニに一時間もいる奴があるか。迷惑にもほどがあるな。

「じゃあ私はお言葉に甘えて、帰ります。また明日ー」

そうしろ。ここで待つている意味はないからな。三人目、三原美聰。これだけの大所帯で教室を後にしたのは初めてだつたが、今では一人しかいない。まだ校門なのにな。

「あの、成瀬君」

相変わらずの遠慮がちな声で話しかけてきた。しかし、今朝までのおつかなびつくりと言つた感じではない。

「今日は一日お疲れ様でした。私と彩衣ちゃんもいろいろ迷惑をかけてしまつて……。成瀬君には本当に迷惑ばかり……」

戸塚に迷惑をかけられた覚えはないな。彩衣は性格上、多少迷惑に感じなかつたこともないが、彩衣の場合悪意からじやないし、元気がいい証拠だろう。俺はその程度でイライラするほど、アグレッシブじやないぞ。

「あの、こんな話知っていますか？」

「このフレーズ……。嫌な予感がするな。

「文化祭で誰かを幸せにした人は、今後の人生がとても幸せになるらしいよ。何でもその昔、周りの人のために自分を犠牲にして文化祭を盛り上げた生徒がいたんだけど、自身は全く文化祭を満喫できなかつたんだつて。でもそのおかげで、みんなから頼られ、好かれるクラスの人気者になつたんだつて。みんなに幸せを与えたその生徒を見ていた神様が、代々文化祭で周りの人を幸せにした生徒に、もつと多くの幸せを上げようと決めたらしいよ」

恐ろしく盛大な話だな。靈ではなく、とうとう神が出てきてしまつたよ。うちの文化祭のために、神が毎年時間を割いて下さるとは、出世したな、うちの高校も。

「成瀬君は今日、麻生君と磯崎さん、一人を幸せにしたから、人の二倍は幸せになれるよーわ、私も今日はすごく楽しかつたし、彩衣ちゃんも楽しかつたでしょ？だから、成瀬君はきっと幸せになれるよー！」

何故だか必死にいろいろ言つてくれる戸塚。今日、俺が頑張つた

ということを評価してくれていいのだろう。麻生や磯崎はともかく、戸塚の感謝の言葉は本音だろう。しかし、残念だな。俺は占いも七不思議も靈も神も信じていないんだ。労つてくれるのにはありがたいが、慰めにしかならないな。加えて、

「悪いな戸塚」

「え？ 何が？」

「今の話は、俺にとつて八つの七不思議だ」

「え？ ええっ！」

七不思議と名付けているなら、何とか情報操作して、七つにするべきだったな。どんなに質が悪くとも、そこは徹底させるべきだった。これ以上ないくらい、くだらない状況になつてしまつ。これでは信じたくても、信じられないからな。ただ、

「ただ、八つの七不思議の中で、今あんたが教えてくれたやつが一番信じたい内容だった。教えてくれて、ありがとな」

「あ、いえ、そんな……」

他人を幸せにしたから、自分も幸せになれる、か。あり得ないほど幼稚で浅はかな内容だが、事実であつてもいいような気がする。そんな甘くて優しい内容の願いが届いても、罰は当たらないんじやないだろうか。ここに来て、俺は都合のいい願望ばかりの七不思議に共感できた。今更過ぎる。しかし、この気持ちの変化は気持ちの悪いことではない。そんな気持ちにさせてくれた戸塚には心から感謝しよう。

「そろそろ本当に帰れ。グダグダしていると、三分の一以上になってしまつぞ」

「え？」

ま、これは冗談だ。今日俺は十時間ほど学校にいるが、その三分の一、というと四百分。時間にして、六時間四十分。確かに今日戸塚とはかなり長い時間一緒にいたが、せいぜい六時間前後だろう。

「三分の一って何のこと?」

俯いて固まってしまった姉の代わりに妹が返事をよこす。俺が例の七不思議の話を適当にしてやると、

「ふーん」

と適当に頷いた。その後、ぶつぶつ言い始めたのだが、おそらく時間を計算していたのだろうと思つ。

「わ、分かりました。今日はこれで帰ります」

俯いたまま返事をよこす戸塚は、傍から見てとてもかわいそうに見えた。俺から見てもそう見えるのだ。下校する他の生徒が見たら、どう思うか。考えただけでも恐ろしい。

「ああ、気を付けて帰れよ」

「あ、あのー」

俺の言葉が言い終わらないうちに、戸塚は大きな声を出して、顔を上げた。それはもうすごい勢いで顔を上げた。おそらくマンガとか小説なら『ガバッ!』という効果音が付くくらいの勢いだ。

「成瀬君と一緒に文化祭を過ごすことができて、本当に嬉しかったです!し、失礼します!」

今度はすげい勢いで回れ右して、帰つて行つた。戸塚姉の勢いに押された俺と妹は顔を見合わせた。耐え切れなくなつたのか、彩衣が噴き出すように笑つ。

「あはは。じゃああたしも帰るね。あんな姉だけど、これからもよろしくね！」

「ああ。お前も氣を付けて帰れよ」

俺が手を上げると、彩衣も手を上げ、姉を追いかけのよう歩き出した。のだが、すぐに戻つてきた。

「どうかしたのか？」

「聞くと、その質問には答えず」

「演劇部の部室での成瀬君はかつこよかつたよ！」

言つて、今度こそ姉を追つて走り出した。全く何を言い出すかと思えば、軽々しく男に向つて、『かつこいい』とか言わないほうがいいぞ。男は阿呆ばかりだからな。勘違いするやつが出てくらはずだ。俺は間違つても勘違いしていいけどな。

その後、すぐに古崎が帰つてきて、続いて姉と鉢合させ、最後に麻生と真嶋が登場した。真嶋は家から車を呼び、プラネタリウムの機材を車に託すと、全員一緒に俺の家に向かつた。文化祭の最中はほとんど一緒にいなかつたわけなのだが、一応TCCとして初めて参加した文化祭だったからな。打ち上げはある程度盛り上がり、これで文化祭は本当に終了した。

「ねえ、結衣ちゃん」「ん? 何?」「結衣ちゃんの好きな人って、成瀬君でしょ?」「あ、やっぱり分かっちゃった?」「うん。イチ口で分かるよ。そんな結衣ちゃんに朗報」「ん? 朗報?」「そう。成瀬君が言っていた七不思議あるじゃない? 三分の一以上一緒にいると、つてやつ」「うん。あれがどうしたの?」「あれって、一緒にいるだけでいいんでしょ。話したり手をつないだりしなくていいんでしょ?」「うん、そうだと思うよ。だって、手をつなぐなんてとてもじゃないけど……」「じゃあ、ホームルームの時間とか片づけとか準備とか、ゼーんぶ合わせれば、三分の一行くんじゃないの?」「え? あーほ、本当だ!」「よかつたね! 結衣ちゃん」「うん、教えてくれてありがとう。彩衣ちゃん」「どういたしました。でもね、結衣ちゃん」「ん?」「実は、あたしも成瀬君と三分の一以上一緒にいたんだよ」「え? もしかして、彩衣ちゃんあなたもー!」「冗談だよ、冗談!」「ほ、本当に?」「うん。で、話は変わるけど、あたしの高校受かったら、トコトコに入らうかな、って思つているんだ!」「彩衣ちゃん、もしかしてそれって話変わってなくない?」

「だつて、楽しそうじゃない？ 麻生とか岩崎さんとか、あと泉さんとか。みんないい人ばかりだし！ もちろん成瀬君もいるし」「やっぱり変わっていないじゃない！ ちょっと、彩衣ちゃん？ 待ちなさいー！」

あとがき（前書き）

今話はただのあとがきになります。
興味がない方は回れ右することをお勧めします。

今回も無事に完結いたしました。

これも最後まで読んでくださった皆様のおかげでござります。

本当にありがとうございました。

これ以降は作者の自己満足、もとに作品に対する想い入れや考えを語っていきたいと思います。

読まずとも、本作には全く影響なこので、

興味ない、とおっしゃる方はすぐさま回れ右することをお勧めします。

さて。さつやく語つていきたいと思います。

今作は6番田と似た雰囲気だなー、と思いながら書いていました。

作品の中で、物語を考える。簡単なようで難しい作業です。

しかし、今回ははつきり言つて適当に作りましたけどね。

成瀬が言つていましたが、クオリティがとてもなく低かったです

ね……

でも、それでもいいや、と思つて書いていたので、OKです。

みんなの学校では七不思議あつたんですかね？

私は七不思議なんてものは皆無でした。あつたのかもしれません、私の耳には届きませんでしたね……。

で、今回話を引っ張ってくれた戸塚結衣さんですが。

一応、『彼女を話の中心にしてほしい』というメッセージをもらつたので、

案外面白いかも、という感じでやつていました。

成瀬と全くしゃべれなかつた戸塚さんが、

徐々に話せるようになつていいく、距離が近づいていく様を描きたかったのですが、うまくできましたでしょうか。

いささか不安は残つてしましましたが、

私は意外にいい「コンビ」のかも、と思いました。

オチについて、ですが、

『七不思議なのに話が八つある』といつものが一番最初に思いつきました。

その後、三分の一~二の話が思いつき、あとがき部分の話が思いつきました。

初めての試みでしたが、どうでしたか?

何となく本編には載せたくなくて、

後日談とか別視点とかそんな雰囲気の話にしたかったわけです。

深い理由はありません。

いらっしゃつときた方がいましたら、申し訳ありませんでした。

最後に今後の話ですが、

少し間が空いてしまうかもしません。というか、間違いなく空きます。

例の『原作者になろう』に出そうと思つていたり、

このシリーズ以外の話を書こうと思つたり、

私生活でいろいろ忙しくなつたり。

いずれにしても続きは書きます。しかし、いつになるか分かりません。

もし覚えていましたら、次回作もよろしくお願ひいたします。

余談ですが、成瀬君たちも、もつすぐ三年生ですね……。

あいがき（後書き）

最後までありがとうございました。
またお会いできるのことを楽しみにしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8793s/>

偶然という名の奇跡10～文化祭の七不思議～

2011年7月11日12時49分発行